

・ ボランティアガイダンスの臨床研究

はじめに - 大学とボランティア活動 -

本論に入る前に大学とボランティア活動について少し記しておく。

阪神淡路大震災の 1995 年はボランティア元年といわれ、ボランティア活動の重要性が広く社会に認識された。とりわけ学生とボランティアに話題が集まり、大学における教育プログラムとしてのボランティア活動の必要性が議論されるようになった。

2000 年の教育改革国民会議によってなされた「奉仕活動の義務化」という問題提起は、ボランティア活動の原理や推進方策のあり方、学校教育での取り上げ方など、青少年とボランティア活動の関わりが、様々な角度・領域から議論になった。以降、青少年の社会化とボランティア活動の積極的な関わりへの関心は教育政策として具体化の段階を迎えている。

2001 年 7 月の学校教育法等の改正によって初等中等教育ではボランティア活動の推進は正課に位置づけられた。2002 年度からスタートした新学習指導要綱では、「生きる力」の育成からの体験活動重視の方向や総合的学習時間の本格的展開が強調され、学校週 5 日制の完全実施といった教育環境もボランティア活動への関心を高めている。ボランティアと教育を巡っては、もはや学校教育へのボランティア導入に関する是非の議論を超えて、子どもの確かな学びと成長に資するボランティア学習プログラムの研究開発や子どもの発達とボランティア活動との相互関係についての実証的研究という課題にその舞台が移っている。

また、総合的な学習等の中でボランティア活動を体験し学習してきた学生を、大学がいかに関迎えるかという課題も浮上している。大学におけるボランティア活動の教育プログラムの課題である。中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動、体験活動等の推進方策について」（2002 年 7 月 29 日）でも大学におけるボランティア教育政策が以下のように詳細にわたって提示されている。

先ず教育プログラムとしての取り組みとしては、大学では、学生が行うボランティア活動を積極的に奨励するために、正規の教育活動としてボランティア講座やサービスラーニング科目、NPO に関する専門科目等の開設やインターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動等の単位認定等を積極的に進めることが適当である、としている。また、学生の自主的な活動を奨励・支援するため、大学ボランティアセンターの開設など学内サポート体制の充実、セメスター制度や、ボランティア休学制度(休学期間中の授業料の不徴収在籍年数制限からの除外等)など活動しやすい環境の整備、学内におけるボランティア活動等の機会の提供などに取り組むこと、について強調している。

特に、学生支援体制では、地域のボランティアセンター、学生関係団体等とも連携しつつ、大学内において学生等に情報提供や相談窓口の開設、大学ボランティアセンターの開設(専任職員、学生ボランティアの配置)などについて言及している。また、開設されるボランティアセンターにおいては、学生のボランティア活動などに関する情報収集・提供、学生向けプログラムの開発、場の開拓、ボランティア養成講座等の開催等の事業を行う、など支援策の必要性について具体的に示している。

こうした大学等や学生の取り組みを支援するため、国においてボランティア教育や活動を積極的に推進する大学等に対する支援措置を講じることが適当である、特に野積極的な支援策を促している。そして、公務員や民間企業の採用に当たっては、学生のボランティア活動等を通じて得られた経験、能力等を一層重視することが期待される、ことも指摘している。さらに、今後、「大学等の評価において、ボランティア等に係る教育の取り組みや学生の自主的ボランティア活動等への支援等を評価指標に位置付けることも検討する、としている。

2003年9月の発表されたCOL(特色ある大学教育支援プログラム)では、明治学院大学の「大学教育における社会参画体験の取り組みと実践 - ボランティアセンターによる教育支援の試み - 」が採択されが、上記大学におけるボランティア教育政策との関連でも関係者の大きな関心を集めている。2003年のCOLは明治学院大学以外にも、ボランティア・サービスラーニング・社会貢献など地域社会と連携した学生の体験型・参加型の教育をキー

ワードとしたプログラム採択が際立った特徴となっている。こうした動向も学生の学びと成長とボランティア活動との相互関係をより積極的に大学での教育プログラムに取り込んでいこうとする気運を後押ししている。先の中教審答申では、大学教育における正課の教育活動としてのボランティア関連科目の開設、ボランティア活動の単位認定などが促され、その活動を促進するための大学ボランティアセンター設置など、学内サポート体制の構築が求められた。そして、体制構築のための支援措置の必要などが指摘された。こうした政策動向を受けて、名称にボランティアを冠する学部学科を設置する大学や、正課でのボランティア関連科目の開設や学生のボランティア活動を正課単位として認定する大学が全国的に増えている。

ボランティア活動を取り入れた授業科目を開講している大学は 1996 年の 100 校から 2001 年度には 192 校へと倍増している。ボランティアに関する講義科目を開講している大学も増えている。ボランティア活動経験で大学入学の是非を問う A0 入試を導入する大学や課外・自主活動でのボランティア活動を推奨する大学も多くを数えるに至っている。

また、大学とボランティア教育を巡っての最も大きな特徴が、情報提供やボランティアマッチングの仕組みを備えたキャンパス・ボランティアセンターを設置する大学が急増していることである。ボランティアセンターを設置する大学は、早稲田・明治学院・国際基督教大学など主として関東圏を中心にすでに 40 数大学に達している。関西でも、神戸大・関学・龍谷大・佛大などの諸大学がすでに同センターを設置し、筆者の所属する立命館大学でも設置検討が始まっている。その名称はボランティアセンターだけでなくボランティアコーナー、ボランティア室、ボランティア情報室・サービスラーニング室など様々だが、専任職員配置のもとで情報提供や相談調整の機能をほぼ共通に持ち、教員が深くコミットしながらボランティア活動を授業に積極的に導入しているところが増えている。学生とのコラボレーションをはかりつつ、ボランティアセンターの設置・運営主体として大学が主体的に関与しているのが近年の特徴である。ボランティア活動を学生の自主的活動としてだけではなく大学教学との関わりで、ボランティア活動を意識的に展開しようとするものの現われといえよう。

このような広がりを持った大学ボランティアセンターが、学生たちの学

びや成長をより豊かで確かなものとしていくための大学でのサポート機関になればいい。ボランティアセンターが大学での新たなボランティアの教育研究機関として発展していくよう期待したい。

立命館大学でのボランティア教育の展開について、少し昨年プロジェクト研究を振り返っておこう。産業社会学部では、2001年度に人間福祉学科開設を契機に、新たな入試方式として高校時代のボランティア体験を持って入学の合否判定とするボランティアスタディ入試(定員 10 人)を実施し、多くの熱心な学生を迎え入れてきた。また、ボランティアコーディネーター養成プログラムが 1999 年度より財団法人キリン福祉財団の支援により社会福祉法人京都市社会福祉協議会と立命館大学産業社会学部による学術協定事業(ボランティア社会プログラム学術協定)として開講され、2002 年度からは新たに京都醍醐ライオンズクラブの援助によって継続開講している。全国社会福祉協議会のカリキュラムに準拠しながら、コーディネーター業務についている現職員だけでなく、現役学生やボランティア組織のリーダー層を主要な対象とし、社会人と学部生が共に学ぶシステムをもっている。開講科目は 5 科目(社会とボランティア、ボランティアマネジメント論、ボランティア活動支援演習、ボランティア情報・調査演習、ボランティアインターンシップ)。8,000 字以上の修了論文の提出をして初めて、プログラム修了証が渡されている。インターンシップ(12 日 90 時間)と修了論文は、立命館大学ボランティアコーディネーター養成プログラムのオリジナルカリキュラムであり、この教育プログラムの中核でもある。本プログラム修了者には「全国ボランティア活動振興センターが定め、立命館大学産業社会学部と京都市社会福祉協議会が実施したプログラムを修了したことを証す」という修了証が発行される。ボランティアコーディネーターはまだ国家資格化されていないが、唯一の全国的な「認定」に準ずるプログラムである。

今回の研究プロジェクトはこのボランティアコーディネーター養成プログラムの第 4 期の学部修了生を中心とするメンバーで構成されている。1 年間の学びを、ボランティアガイダンスの企画・運営という実践の場で検証する試みであり、プログラムのフォローアップとしても位置づけた。

(文責：津止正敏・小笹蓉子)

第1章 ボランティアガイダンスのプログラム

第1節 ボランティアガイダンスの狙い

一般的にボランティアガイダンスを行う目的は3つ挙げられる。1つ目はボランティア活動の場やその情報を求めている人・ボランティアを求めている団体、この両者に対する情報提供。2つ目は、先に述べた両者の交流の場や、個々の情報交換の場の提供。ここから、新しいボランティアが生まれ、団体や施設の需要を満たす事を望んでいる。そして3つ目は、ボランティア活動に全く関わった事のない人たちに対する、ボランティアの知識提供。勉強会や講演会を行う事によって、ボランティア活動とはどのような事なのかを知ってもらうのだ。そして、ボランティアに対する偏見や隔たりを取り除き、ボランティアを身近に感じてもらう事によって、ボランティア活動を促進する。そして実際にボランティア活動を行っている人からの相談など、総合的な相談の場も提供する。

このように、ボランティアガイダンスとは、ボランティア活動のきっかけを生み出し、ボランティア活動をスムーズに行えるように支援する場であるといえる。

第2節 第1回ボランティアガイダンス

1) 第1回ボランティアガイダンス企画コンセプト

立命館大学の学生に対し、ボランティア活動に対する実態調査を行ったところ立命館大学の学生はボランティア活動経験数の割合が全国平均よりも高い事が認められている。大学入学以前の経験数では他大学の学生とあまり差が無いにも関わらず、このような結果が出たという事は、立命館大学は課外活動のしやすい環境にある。そしてそれが校風となり活動的な学生が集まりやすいという事が言えるだろう(注1)。

そこで反対に、活動経験がない学生の活動に参加しない理由を見てみると、「きっかけ(情報)が無い」という理由が最も多い事が分かった。これ

は、ボランティア経験の無い人であっても、きっかけがないだけで少なからずボランティア活動に関心を持っているのだと考える事が出来るであろう。そして、きっかけや情報がないと訴えている人は、ボランティア活動を始めたいとは考えていない人だけではない。ボランティア活動に関心があり、具体的に始めたいと思っている人も、情報を求めているのである。何かを始めたいけれど、何からどのようにして始めれば良いのか分からないという人は大勢いるのだ。

そこで私たちは、立命館大学の学生のボランティア活動を行う上での環境をより良くする為に、大学ボランティアセンターを設立するというプロジェクトを始動させた。そして私たちは、ボランティアセンターのスタッフとしてどのような具体的業務があり、実際にどれほどの学生がボランティアガイダンスに興味を持つのかという事を把握する為に、ボランティアセンター開設に先駆け、第1回ボランティアガイダンスを開催する事となった。このボランティアガイダンスは、あくまでも現状を把握するためのものであり、どれほどの来場者数であっても全くそれは失敗ではない。このようなコンセプトの中で、このボランティアガイダンスは開催された。

2) 第1回ボランティアガイダンス

ボランティアセンターを設立する為にボランティアガイダンスを行う。このコンセプトの元で、2003年4月30日(水)と5月1日(木)の2日間、両日とも午後3時から6時までの3時間の日程で、立命館大学ボランティアセンター設立プロジェクトによる第1回ボランティアガイダンスが以学館地下1階ボランティアコーディネータールームにて行われた。このガイダンスで私たちがターゲットとして定めた対象は、今年の4月に大学に入学したばかりの新生である。産業社会学部には人間福祉学科が設置されており、福祉分野に興味を持つ学生が多く入学してきた事が予測される。そこで、大学に入学したばかりでまだ大学で何を始めようかと悩んでいるであろうこの時期に、ボランティアを知ってもらう為に新生を対象にしたのである。

A ガイダンス内容

a 参加団体

この第1回ボランティアガイダンスでは、ブース出展とチラシでの参加に分かれ、1日だけの参加も含めると両日合わせて約20の団体に参加して頂いた。今回の企画は発案から実行までの期間が短かったため、参加団体についてはメンバーの知り合いを中心に声をかけて集められた。その為、ブース参加団体は学内団体が中心となった。しかし今回は不参加であった団体の中には「参加したいが、日程的に厳しい」という声もあり、このような団体にはチラシだけでも参加して頂くように要望を伝え、多くの団体からのブース・チラシによる参加を得ることが出来た。

b 配置

ブース出展での配置は、ブース用長机を入口から入った真正面に並べ、ボランティア側と学生側が対面式に話を出来るようにセッティングした。しかし、これは入口から中を覗いた時に正面に机が並び、団体が入口をじっと見ていられる状態であり、参加者が入りづらいという意見が出た。その為、2日目は入口の正面に団体が座ることの無いように机の配置を変更し、圧迫感を感じる事のないようにした。他にも今回のガイダンスでは、どこの団体かを分かりやすくする為に、各団体の机の上に団体ごとのネームスタンドを立てていた。少しでも参加者に団体名が分かるようにしていたつもりであったが、人が増えてしまうと人ごみに隠れてよく分からなくなる。そして自分の希望する団体がいる事に気づかないまま帰ってしまう参加者もいたようであった。そこで2日目のガイダンスの際には、団体名などが書かれた会場内の配置図を作成した。そしてそれを壁に貼り付け、どの団体がどこにいるのかを把握出来るように配慮した。

そして今回のガイダンス会場には受付とフリースペースも設置した。受付は入口の前に机を1つ出し、そこで参加者に学部や氏名を記入して頂き、ENTRYシートやボランティア情報シートを1人ずつ配付した。フリースペースは、会場の一番奥に大きな机を用意した。それはボランティア情報がまとめられたファイルの閲覧やアンケート記入、その他自由に交流を深めてもらう為の場として設置したのである。

更に今回のガイダンスにブースとして出展する事の出来なかった団体にもチラシ出展という形で参加して頂いた。もちろんブース出展もして頂いている団体にも協力して頂き、それぞれの団体のチラシを封筒に入れ、各封筒には分野・団体名などを記入した。封筒には数十枚のチラシを入れておき、参加者が自由に持って帰る事が出来るようにした。そしてチラシの入った各封筒や外部団体を中心としたポスターをブースとは反対側の壁に貼り付けた。ブースのスペースとは反対の場所で、チラシやポスターなどを見る人たちが流れるような形で会場には設置したのだ。このチラシ出展に関しては、1日目が終了した時点でブース出展もしている団体のチラシと、今日は参加できなかったチラシのみの団体の違いが分からないという意見が出た。そこで2日目には参加団体のチラシであるという事が明確に分かるように、封筒に記しづけをして設置する事にした。

c 雰囲気作り

私たちの突然の依頼に対して、わざわざ時間を割いて参加して頂いた団体や、ガイダンスに興味を持って参加してくれた人たちが、少しでも居心地良いと感じてくれる空間を作る為に、私たちはお菓子やお茶を用意した。それを各団体ブースとフリースペースに用意し、自由にくつろげる空間を意識した。そして他にも、ポラロイドカメラでボランティアガイダンスの光景や参加者の方などを撮影し、参加者の方にプレゼントをしたり、会場内に貼り付けるなどして、会場の雰囲気を少しでも明るく和やかにした。そして少しではあるが会場内に飾り付けをし、少しでも堅苦しい雰囲気を取り除く努力をした。

d 広報

今回のガイダンスに関しては前述したように、発案から実行までの期間が短かった。その為、今回のガイダンスの広報は十分には出来なかった。しかしこの短期間で、いかに有効的に広報を行うかを考え、私たちがとった行動は大きく分けて5つである。その5つとは、1 回生基礎演習クラスでのビラ配付。 産業社会学部の自治会役員に依頼し、エンターを通してビラの基礎演習での配布や説明。 実習指導室の先生を通しての情宣。

これは、実習指導室の先生方の協力により、ガイダンス当日の授業の際にボランティアガイダンスが開催されている事をアナウンスして頂き、授業後の2回生もこのガイダンスに出来るだけ参加してもらえるように伝えて頂くというもの。学内掲示板でのビラ貼り。呼び込み。これは、ガイダンス開始直前にはスタッフがビラを持ち、特に授業終了後の人が溢れている時間帯に直接呼び込みを行うというもの。そして会場が地下という分かりづらい場所であった為、階段などに案内表示を貼り付け、会場に人を流し込む。

このような積極的広報により、より多くの参加者を呼び込む事が出来た。

e 参加者状況

ガイダンス開始直後は、あまり人が押し寄せてくるという事は無かったのだが、除々に人の流れが出来始め、気が付くとどの団体にも人がいて話をしているという状態であった。各団体、平均的に約2~3名で参加して頂いていたので、最初は参加者1名に対して団体2名で対応をしている場面も見られたが、参加者の人数が増えてくるとそれぞれが1対1で話している場面も見られるようになった。どの団体も、参加者と和気あいあいと話し込み、自分たちの普段の活動説明など、団体アピールに力を入れていた。そして参加者側もそれに熱心に聞き入っており、少しではあるがその場でボランティアに参加することを決めている参加者もいたようであった。

参加者の数は、特に1回生の基礎演習がある2日目には増加し、会場には人が詰まっているといっても過言ではないほどの状況になっていた。チラシだけをもらいに来たという参加者も少なくなかったのだが、そのチラシやポスターを見るだけでも一苦労という状況であり、ましてや低い位置にあるブース上のネームスタンドなどは全く意味を果たしていなかった。その対策としてとった配置図であったが、それに気づく事のないまま帰ってしまう参加者も少なくはなかった。

そして参加者の中で驚いたのは、3回生や他学部からの参加者の姿が見られた事である。今回は準備の都合上、あまり他の学部や上回生への広報が出来なかったのだが、予想以上に他学部生・上回生の参加があった事に驚きを感じた。そしてガイダンスが終わってみると、2日間で100名を超

える参加者が集い、当初の私たちの予想を上回る結果となった。

f ガイダンス中のスタッフの動き

常時、最低でも1~2名のスタッフが会場に待機し、受付業務以外にも参加者の質問や相談、その他会場の整備を行っていた。この中で参加者にとって特に重要な役割を担っていたのは、質問・相談であった。2日目など、人が溢れてくると相談なども増えてくる。この中で最も多かった相談は、「自分が何をしたいのかまだ分からない。だからどこに話を聞いて良いのかが分からない」というものであった。他にも、様々な質問などが挙がり、答えられない場合には他のスタッフと協力し合い、解決を図った。

B 参加者の反応（ブース協力団体・参加者）

今回のガイダンスでは参加者全員にアンケートを配布し、ガイダンス終了後には各団体の代表に対してアンケート調査を行った。

a ブース協力団体

今回のボランティアガイダンスに参加していただいた各団体からは、「ボランティアスタッフが不足していて、新しいメンバーを探していたので、今回は本当に良い機会になった」、「同じ学内にある団体であり、同じような活動をしているにも関わらず、これまで交流をもつ事があまり無かった。他の団体が普段どのような活動をしているのかを知り、お互いに情報交換する事は重要。今回は団体同士の交流もとれて良かった」等、多くの意見を得ることが出来た。これまで、このようなガイダンスの場に、団体側として参加する事はあまり無かったと話す方もおられ、自分たちの団体のアピールはもちろん、自分たちも情報を得る事が出来たと、好評を得る事が出来た。

b 参加者

ブース出展団体同様、参加者からも「色々なボランティアを知れて良かった」、「直接団体の人と話して、雰囲気を知ることが出来て良かった」、「会場が狭い」、「環境系や国際系のボランティア情報が欲しかった」など様々な意見を得る事が出来た。団体に比べて回答数が多かった事もあるが、団

体よりも好評も多いが不評点も多かった事は確かである。

C 反省点

第1回ボランティアガイダンスを終え、アンケート結果などに目をやると、反省点や目の行き渡っていなかった点が浮き彫りになったように感じる。今回のガイダンスで反省すべき点を整理してみると「準備期間が短く、全体的に焦って準備をしてしまった」、「会場の手配が出来ず、人数に対して部屋が狭かった」、「会場内の設営や準備が十分なものではなかった」、「参加団体の分野に偏りが出来、参加者の期待に答えられない事もあった」、「広報が十分に出来なかった」等が挙げられる。しかし初めにも述べたように、今回のガイダンスに失敗はない。今回のガイダンスでの反省は今後に繋げる為のステップである。この反省によって、ボランティアを必要としている団体と興味を持っている学生の多さ、ボランティアセンターを運営する上でのスタッフのスキルの必要性、そして何より学生のためのボランティアセンターの必要性などを感じる事が出来たのだ。

(文責：福住真希)

第3節 第2回ボランティアガイダンス

1) 第2回ボランティアガイダンス企画コンセプト

第2回ボランティアガイダンスでは、第1回のガイダンスコンセプトである「ボランティアをやりたい人」と「ボランティアを必要としている人」との出会いの場を作り、コーディネートする、ということを引き続き行うと同時に、もう一步踏み込み、実際の活動へとつなげやすくするような企画を考えた。具体的には、ボランティアやNPOの基礎的な知識を学ぶための講義やグループディスカッション、普段気づかないような生活の諸問題に関する気づきを得るための車椅子や高齢者体験、立命館大学内でも必要としている人が多くいるノートテイクに関する講義と体験など、色々な体験を通じて新たな気づきを得ると同時にそこからボランティアへの関心を高めることを目標とし、ボランティアをより身近なものであるという意識付けを図ることも目指した。

2) 第2回ボランティアガイダンス

前述のコンセプトを基に2003年6月30日から7月3日までの4日間、立命館大学ボランティアセンター設立プロジェクトによる第2回ボランティアガイダンスが以学館地下1階多目的ホール3にて行われた。今回のガイダンスでは前回よりも対象者を拡大し、学部・回生関係なく、前回より多くの人に参加してもらえるような広報活動や会場作りを行った(資料1)。

A 第2回ガイダンス内容

a ボランティアに関する講演会(資料2)

第2回ボランティアガイダンスの初日に当たるこの日にはまず「ボランティア」とはどういったものなのかという理解を深めてもらうことを目的とした講演会を開催した。講演者にNPOセンターの深尾氏をお招きし、「ボランティアって何? NPOって何?」ということをテーマにお話いただいた。講演後には参加者を3つのグループに分け、その中にスタッフが一人チューター役として入り、グループディスカッションを行った。それぞれのグループでは自分のボランティアの活動体験や価値観などに関する意見交換が活発に行われており、ボランティアへの理解を深める良いきっかけ作りとなったのではないだろうか。

b ボランティア団体ブース出展

第1回ボランティアガイダンスに引き続き、今回もボランティア団体によるブース出展を行った。前回は準備時間があまりなく、学内で活動しているボランティア団体がほとんどであり、幅広い情報提供ができなかったため、今回は学外で活動している団体にも積極的に参加を呼びかけ多くの方に協力していただいた。ブース出展が日程的に難しい場合はチラシのみでも参加していただき、参加者により多くの情報を持って帰ってもらえるよう配慮した。

配置は入り口付近にチラシなどを並べ、チラシだけでも持って帰りやすい雰囲気を作った。ブースは団体と参加者がきちんと向かい合って話せるよう、且つ、圧迫感を感じないような配置を心がけた。また、どこにどの団体がいるのかを分かりやすくするため、机の上にネームスタンドを立て

たり、壁に団体名を明記した紙を貼るなどしてわかりやすくなるよう努めた。また、会場図を作成し受付にて参加者に渡すようにした。

受付では参加者に氏名の記入をしてもらい、会場の案内図とボランティア団体の紹介冊子、アンケートを渡した。会場の入り口付近に机を用意し、帰る際にアンケートの記入をしてもらえるようにした。

c 介護体験（資料3）

以学館内にある介護用ベッドや介護用風呂の存在を知っている学生は非常に少なく、このような設備が整っていることを多くの学生に知ってもらうため、また、介護用の設備の優れた点を実感してもらうために、この体験を企画した。そして体験を通じて実際の活動へと結びつけることが狙いである。

体験の内容は、介護用風呂体験、ベッド介護体験、食事介助体験である。介護用風呂体験では実際に入浴介助の雰囲気を感じてもらうため、介護用風呂の使い方をレクチャーし、2人1組となって介助する人と介助される人の役割を演じてもらった。このような経験をしたことがある人はほとんどおらず、参加者には新しい発見があったようである。ベッド介護体験ではスタッフがベッドからの起こし方をレクチャーし、その後実際に体験してもらおうという形を取った。コツさえつかめばそれほど体力が要るものではないことを感じてもらえたようである。食事介助体験では2種類の体験をしてもらった。まずアイデア食器を活用し、実際に自分で食事することと食事介助をすること。もう一つはアイマスクをして鼻をつまんで食事をしてもらうことの2つである。一つ目では食事介助をすることによって相手のペースをつかむことの大切さや、相手のペースをつかむためにはコミュニケーションが必要であることを感じてもらうことを狙いとしていた。二つ目では自らの感覚が失われた時の食事の雰囲気をつかんでもらうため行った。

普段なかなか体験することのないものなので、参加者からは驚きの声が上がっていた。

d 車椅子体験・高齢者体験（資料4・5）

この体験は以学館内にあらかじめコースを設定し、車椅子に乗って、または高齢者疑似体験装具を身につけてそのコースをまわるというものである。実際に体感することによって、以学館内のバリアフリー状況を知ってもらうことや、普段との目線の違いを感じてもらうことにより、新しい視点を見つけてもらうことが狙いである。また、買い物などの体験を通して、普段何気なくできていることでも時間がかかったり、予想以上に力が必要であるということに気づいてもらい、その気づきから協力することの大切さを理解してもらうことを目的として行った。実際に自分で体験してみても学んだことが多いというスタッフの意見から出てきた企画であり、参加者も気軽に体験できることが良かったようである。普段気づかないようなことに気づくきっかけとなったようであるし、バリアフリーの必要性も実感してもらえたのではないだろうか。

e ノートテイク講座

立命館大学で今必要とされているボランティアの一つにノートテイクがある。ノートテイクのやり方やその必要性を多くの学生に理解してもらい、実際の活動へとつなげることを目的としてこの講座を企画した。講座当日は要約筆記サークル「かたつむり」の方々を講師としてお迎えし、要約筆記の成り立ちややり方をレクチャーしていただいた。参加者には実際に要約筆記を体験してもらう時間を作り、その成果を参加者同士で発表することも行った。

B 会場の配置・雰囲気作り

ガイダンス初日はやはり人がまばらで会場に入りづらい雰囲気があったようである。初日はチラシなどを置いたフリースペースを会場の奥に配置していたため、チラシだけでも見たいと思う学生が入りにくかったようである。そこで、二日目以降はフリースペースを入り口付近に配置し、気軽に入れるよう努めた。また、ガイダンスの企画自体が夕方から始まる場合でも、昼休みごろから会場をオープンし、「何をやってるんだろう？」という関心を持ってもらえるようにした。入り口付近に何のガイダンスを開催

しているのかというメニューを書き、掲示するなどして興味を引くようにした。また、堅苦しい雰囲気を出さないため、飾り付けをしたり音楽をかけたりと明るい会場を作る努力をした。前回のガイダンスと同様にポラロイドカメラを大活用し、参加者にプレゼントしたり、会場内に貼り付けるなどしてガイダンスの様子が伝わるようにした。

C 広報

前回の反省を活かして今回は広報活動に積極的に取り組んだ。方法は以下の7つである。

1 つ目は、正門と東門に立て看板を設置したことである。この看板の威力は非常に大きかった。他学部の学生の参加者のほとんどはこの看板を見て参加したとのことである。また、この看板は通常大学からの連絡を多く載せているものなので、非常に信頼性が高いということも効果が上がった理由の一つだと考えられる。

2 つ目は、基礎演習クラスへチラシを配布したことである。産業社会学部の自治会に依頼し、エンターを通じて基礎演習でチラシの配布を行った。

3 つ目は、学生センターやキャリアセンターにチラシを設置したことである。それぞれの担当者の方に趣旨を説明し、チラシを置いてもらえるようにした。

4 つ目は、掲示板へのビラ貼りである。以学館だけでなく、それぞれの学部の基本棟にビラを貼った。

5 つ目は、学内でのビラ配りである。スタッフが時間を見つけて学内でビラ配りをした。

6 つ目は、呼び込みである。ガイダンス開催中にもビラを配り、会場まで案内するという呼び込みを行った。

7 つ目は、ホームページで宣伝したことである。大学のホームページでガイダンスの内容などを広報してもらった（資料6）。

D 参加者の反応（資料7）

初日から2日目はまだ何をやっているのかよくわからない雰囲気だったらしく、参加者の人数もまばらだったのだが、3日目、4日目ではチラシだ

けでも見に来る学生や実際にブースに立ち寄って話を聞くという学生が増えてきたようである。参加した学生は皆とても積極的にボランティア団体からの話を熱心に聞いていた。また、講演やノートテイクに外部講師を招いたことによって、参加者の真剣度も上がっているように感じた。看板の設置が功を奏して、他学部の参加者が増えたことも非常に良かったと思う。

ブース出展に協力してくれたボランティア団体の方々からも学生と話す機会ができてよかったという声を聴くことができたので、学生とボランティア団体を結ぶためにこのガイダンスは非常に有効であるということを再認識した。また、ボランティアに関心を持っている学生が多くいることを改めて感じ、ボランティアセンターの必要性、そこでの情報提供の重要性というものを認識した。

第4節 ボランティアガイダンスの内容と今後の課題

1) 第1回ガイダンスと第2回ガイダンスの違いについて

一番の違いは第2回ボランティアガイダンスは4日間に亘る開催だということだ。4日間という長期の開催のため、前回のブース出展だけでなくバラエティに富んだ企画を立ち上げる場所から始まった。これはガイダンスに多くの参加者が集まり、それによって更に多くの学生にボランティアへの関心を持ってもらうことも目的としている。そして内容に変化を持たすことにより、様々な参加者を獲得することを狙いとしている。また、前回の反省を活かし、より多くの学生にボランティアとの出会いの作ることができるよう第1回ガイダンスとは場所を変えて行った。場所を変えたことによる効果は非常に大きかった。なるべく多くの人を通る場所で行い、入りやすい雰囲気を作ることはとても重要であることを学んだ。前回から引き続き行っているブース出展に関しても、規模を拡大できたことはボランティアガイダンスの内容をより濃いものとすることができた要因だと思われる。学内の団体だけではどうしてもただのサークル紹介・団体紹介になりがちで、学生のやりたいボランティアとのマッチングができる可能性が低くなってしまふ。ブースで話を聞いた学生が実際に活動を始められるよう、団体と学生(参加者)をコーディネートするという大切な役割を忘

れてはならないことを再認識した。

また、より多くの情報を提供できるように情報入手にも力を入れた。情報提供はボランティアセンターの重要な役割の一つである。幅広い情報提供ができるよう、ブース出展が不可能であってもチラシによる情報提供を積極的にお願いしたことにより、前回よりも多くの情報を入手・提供できたことは非常に大きな成果だったと思う。

その他にも、実際に体験ができる場所・機会を設けたことはボランティアと直接結びつくきっかけを作ると同時に、新たな気づきを得てもらうきっかけとなったのではないだろうか。第2回ガイダンスは前回と比べると長期間の開催であり、企画にバリエーションをつけることがより多くの参加者を獲得する上でも重要であったことは明らかである。その中で「体験」という企画は目をひきやすく、面白みのあるものだったのではないだろうか。ガイダンスが長期に亘る場合にはガイダンスの内容自体に変化を持たせることが大切だということ学んだ。

2) 2回のガイダンスを通じて見えてきたボランティアセンターの今後の課題

私たちスタッフは短い準備期間の中、2回のボランティアガイダンスを経験してきた。この2回のガイダンスの反省点や課題を整理し、ボランティアセンター設立に向けての課題を述べていきたい。

まず一つ目の課題は、ボランティア団体の情報入手・整理・提供である。今手元にある情報を随時更新することはもちろん、学生の幅広いニーズに対応するためにはもっと多くの情報を集めることが必要である。そしてその情報をボランティアセンター内できちんと整理・共有し、提供できるまでに持っていくことがセンター運営のためには不可欠である。ボランティアの情報提供ができることはボランティアセンターの役割として当然のことであり、この作業を怠ってはいけず発展していかないとあろう。

二つ目の課題は定期的にガイダンスを実施し、学生のボランティアに対する意識を高めることである。これまでの2回のガイダンスはもともとボランティアに関心のある学生を対象と考えているが、今後大学全体でボランティア意識を高めていくためには、これまでボランティアに関心を持っ

ていなかった学生に焦点を当てることが必要となってくる。これまでボランティアには関心がなかったが、ガイダンスを通じて活動へと実際に動ける学生を増やすこともボランティアセンターを設立する上で大切な目標となってくるはずである。

三つ目はボランティアセンター自体の広報活動を行うことである。学内での認知を高めるためには実際に活動することが大切である。定期的にガイダンスを開催すれば、ブース出展に協力してくれる団体を拡大していくことが可能となり、各団体の情報をボランティアセンターで把握していくことができる。また、ボランティアセンターの信頼性を高めることはボランティア団体にとっても学生にとっても大切なことである。私たちの活動の趣旨をきちんと説明し、どういった活動を行っていくのかを明確にすることは今後の活動を左右する大切な仕事である。自分たちの活動をきちんと広報することも重要となってくると思われる。

四つ目はスタッフの拡大と組織化である。現在は10数名という人数で動いており、人数が少ないということは動きやすいという長所とともに、一人ひとりの負担が大きくなるという短所を孕んでいる。また、組織化されておらず、だれかが指示を出して動くということはない。皆がそれぞれ気づいたことを行うということは自主性があって良いと思うが、今後センターを立ち上げる上ではネックとなってくるのではないだろうか。スタッフの管理やスキルアップなど今後考えていかなければならない問題は多くあると思う。

以上のように2回のガイダンスを経験したことにより、センターを設立するにあたっての課題が明確になってきた。ガイダンス参加者の反応からもボランティアセンターの必要性を明らかであり、設立を実現するため今後課題を一つずつクリアしていきたい。

(文責：山根玲子)

【注釈】

- 1 津止正敏・秋葉武・足立陽子編『大学ボランティアセンタースタディ - 立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて - 』立命館大学人間科学研究所、2003年。

【参考文献】

津止正敏・秋葉武・足立陽子編『大学ボランティアセンタースタディ - 立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて - 』立命館大学人間科学研究所、2003年。

第2章 ボランティアガイダンスの PDS (Plan Do See)

ボランティアセンターの設置を目指す我々が始動した時期が春ということで、特に新生が、何かしら活動の場を求めているということが考えられるため、その出会いの場作りとしては、ガイダンスを行うことが一番有用ではないか、ということからボランティアガイダンスを行うことになった。

第1節 第1回ボランティアガイダンスについて

日時・・・4/30、5/1

場所・・・ボランティアコーディネータールーム

1) Plan

A 企画意図、内容

ボランティア活動の場を求める学生の現状や逆に団体が求めているボランティアを把握し、また、そういった学生に対し設立されるボランティアセンターの運営する上でのマネジメント、ボランティアを必要としている団体に対してどのような働きかけが必要かをスタッフが理解し、今後ボランティアセンター開設に向けての目的、開設後も行なわれるであろうガイダンスにおいてしなければならない事を明確化する。内容は、ボランティア団体が、我々の設置した会場において、各々の団体やボランティアのアピールを立命館大学生、特に新生を対象に行うといったもので、双方(新生・ボランティア団体)にとっての出会いの場を作る。

B 準備

a ガイダンスの形式

まずガイダンスの進め方として、リレー式とブース式の二案が出された。それぞれの特徴を挙げメリット、デメリットを出して検討を行った。

リレー式とは、1 団体あたりの持ち時間を決め、タイムテーブルを用意

して、全体の中で各団体にプレゼンテーションをしてもらう方法で、参加者には、興味がある団体が見つければ、後で個別に話を聞いてもらうという形になる。この方法のメリットは、参加者が「これがやりたい」というものが決まっていなくても、いろいろなジャンルの団体のプレゼンを聞きながら考えることができ、出展団体にとっては、より多くの人に向けてプレゼンすることができるということである。一方デメリットとしては、途中から来た人や途中で帰る人は、プレゼンを聞けない団体がある、出展団体が多数の場合に時間的に2日間で行うことが不可能ではないか、といったことが挙げられた。

ブース式とは、各団体のブースやパネルを設置し、参加者がそれらを自由にまわり、各団体に説明してもらうという方法である。この方法のメリットは、参加者は好きな時間に来ることができ、「この分野のこんな活動がしたい」という興味ははっきりしている参加者は、興味のある団体の話をじっくり聞くことができるということである。一方デメリットは、「何かしてみたいけど、自分のやりたいことが決まっていない」という人は、どこからまわったらいいかわからないという状態になりうる可能性が高いということが挙げられた。しかし、デメリットの対策として、総合案内所やナビゲーターを置く、個別相談でどんなことに感心があるのかを話し合う、どんな団体が参加しているのか参加していない団体でもビラを配布したりせつめいをおこなったりするということが挙げられた。

結果、デメリットをカバーできる可能性が高く、より参加者のニーズに応えられ、また時間的制約があることも考慮に入れた上で、今回はブース形式でガイダンスを行うことが決定した。

b 参加団体

参加団体については、スタッフ各自が知人を介して団体に依頼を行った。20程度の団体が参加した。

c 会場

急な企画であったため、場所を確保することはできず、普段会議などで使用している、ボランティアコーディネータールームを使用して行うこと

になった。ルームは企画を行うには広いとはいえず、また場所も以学館の地下の奥とわかりにくいため、十分な会場設営の計画と広報が必要だということが考えられた。

d 広報

宣伝用のチラシを制作し、1回生を主なターゲットとしていたため、産業社会学部において基礎演及びコア科目で合計2,000枚程度配布を行った。コア科目においては、峰島教授、景井教授、小澤教授の担当する授業で始まる前に少し時間をいただき、1~2分のマイクインフォメーションをスタッフ2名ずつで行わせていただいた。授業会場によって反応はまちまちであったが、耳を傾けてくれる受講生も多く、拍手が起こった会場もあり、ガイダンスを開催するにあたっての励みとなった。

また、ボランティアコーディネーター養成プログラムの志藤修史さんによる大講義授業において、スタッフ4、5名が前に並び、チラシの配布、及びマイクインフォメーションを行った。加えて、当日手伝いのスタッフも募集をした。

2) Do

A 当日のスケジュールとスタッフの動き
タイムテーブルは以下のようにになっている

1日目

9:00 ~ 準備

15:00 ~ ブース開店

18:00 終了

2日目

9:00 ~ 準備

15:00 ~ ブース開店

18:00 ~ 終了・ミーティング

B 詳細

初めてのガイダンスということで、どのくらいの反応があるかという不安でいっぱいの中、とうとう4月30日、ガイダンスの当日がやってきた。

15:00からブース開店ということで、その時間に間に合うように準備を行った。チラシ配りも行ったが、主に準備は会場設営で、団体名を記した三角柱を制作したり、団体のピラを半分に切った封筒に入れ壁に貼ったり、机をブース形式になる用に配置したり、また、自分たちで制作した看板を外に出して、目立たない場所なりに今日からのガイダンスをアピールした。そして、会場内に入ってきやすい雰囲気を作るために、内部の飾り付けも行った。先ほどの、団体のピラだけでは寂しいので、切り絵をして貼り付けたり、スタッフの写真を紹介も兼ねて準備をしている様子などをポラロイド写真で撮り壁に貼ったり、メッセージ入りの折り紙を貼ったり、花を飾り付けたりすることにより、会場の雰囲気が一気に明るくなった。目的を明確にもっている人はもちろん、ただふと立ち寄った人にも、ボランティア活動するということに触れていってもらうことがこの企画においては重要であり、そういった人たちが入りやすい雰囲気を作るように心がけた。15:00いよいよ開始となり、授業が終わる時間になると多くの人が会場に足を運び、ブースの数が限られているため、ごった返す状態になることもあったが、色々な団体のチラシを置いていたので、それを集めたり目を通してもらうことで参加者の待ち時間をあまり無駄にせずすんだ。また、受付において、参加者と写真をとってプレゼントを行い、そういったコミュニケーションの中で、ガイダンスの感想やボランティア活動に対する想いなども聞くことが出来た。

2日目は、1日目ごった返したことを考慮して、集まれる人で集まって会場の設営をやり直した。団体の机をぎりぎりまで壁際に下げたり、アンケートを書いたり談話するスペースを入口から離して奥のほうに入れて、より多くの人が入れるようにした。また、どういった団体がきているのかをより分かりやすくするために、参加団体を分野で大まかに分けて並べ、机ではなく後ろの壁に分野を大きく書いた紙を張り出した。前日よりもスタッフも対応に慣れ、初日に比べて割とスムーズにガイダンスを行うことが出来た。手があいているスタッフは積極的に参加者に声をかけ、参加し

た目的に添えるように色々アドバイスをしたり、話をしたりした。そうして、新しいことに触れようとする多くの参加者の笑顔や、意欲的な団体の姿で活気付いた会場において時間はあっという間に過ぎ、終了予定時間より少しオーバーして企画は終了した。

C 広報

当日は、やはり場所がわかり難いのではないかということから、会場の場所を案内する矢印の紙を階段などに張り、より多くの人に参加できるよう心がけた。また、事前に宣伝を行った人に、今日が企画当日ということ伝えるため、また、あまり宣伝が出来なかった学部外や他回生に宣伝を行うために、東門、北門においてビラ配りを行った。興味を示し、貰っていってくれる人も多かった。

3) See

エポック立命（BKC）において、このガイダンスの反省会を行った。

細かい反省点としては、場所が大きなところが取れなかったため、混雑してしまったこと、その狭い場所を有効に利用するための設営が十分に練られなかったこと、他学部への宣伝があまりできなかったことなどがあげられる。

それ以上に、スタッフの中でガイダンスの今回の意義が明確になっていなかったことが大きな反省点である。そのため、今回のガイダンスが「ガイダンスではなくただのサークル紹介に終わらなかつたか」という反省もあげられた。なぜガイダンスをやるのか、今回のガイダンスの目的はなんだったのかということも、もう少し話を詰めてやるべきであった。

しかし反面、学内ボランティア団体同士の交流が今までほとんどなかったことなどの現状も知ることができ、そういった団体同士が交流する場を提供できたことは団体の今後の活動に大きく影響することができたであろう。何より、参加者がボランティア活動する上での手助けができ、また、学内のボランティア活動へのニーズを、もちろん潜在的なものも含めて、肌として感じ取れるという点においても非常に意味のある内容となつたし、ボランティアセンターの必要性をスタッフが再確認し、今からなされなけ

ればならない事が浮き彫りとなったことから、今回の企画は成功といえるものであったであろう。

第2節 第2回ボランティアガイダンスについて

日時 6/30~7/3

場所 以学館多目的ホール3

1) 全体に通じる目的

前回の反省点を活かし、より目的を明確化させ、内容もそれに合わせて多分化させた。今回の目的は『学生生活に慣れた新生が探している「何かやりたいこと」のひとつとしてボランティアをその選択肢として考えてもらえるように、ガイダンスを行う』ということである。ボランティアをするにあたっての第1ステップとして、どんなものか、というものを新生を中心に触れていってもらおうということが全体の目標となった。

2) 講演会

日時 6/30 16:30~

場所 以学館多目的ホール3

A Plan

a 企画意図、内容

特に、これからボランティアを始めようという人たちに対し、ボランティアとは？NPOとは？という内容で講演・討論することで、不安の解消をしてもらったり、また、考えを深めてもらい、今後の活動に役立ててもらおう。

内容は、NPOセンターの深尾昌峰さんに、「ボランティアとは何か？NPOとは何か？」という議題で講演していただき、その後、参加者が講演を聞いて考えたことなどをグループに分かれて討論し、それぞれの意見を共有する。

B 準備

a 講演会の形式、内容

講演会を行うにあたって、どのようにすればより意図に沿った内容にできるかを、担当スタッフで何度も話し合った。ボランティアを始めようとする人たちを対象とするのであるから、「ボランティアとは？」といった、わかりやすそうで実は一番わかりにくい所をテーマにするのがよいのではないかということになった。そして、そういった内容なら、ボランティアコーディネーター養成プログラムで何度か講師をしていたNPOセンターの深尾昌峰さんなら、参加者に、「伝わる講演会」をしていただけるであろうということになり、依頼をした。

さらに、一方的な講演会よりも、参加者と講演者とスタッフが相互に意見を交わし合えた方がより目的を達成できるのではということになり、ただ単にフリートークとするのではなく、より積極的に参加できるように、講演によってボランティアに対するイメージは変わったか、などの意見をグループ別に話し合い、発表などもして意見の共有、交換を図るといった内容になった。どの程度の参加者がいるかを把握するため、当日参加も可能ではあるが、参加希望の場合はメールを送ってもらうか、申し込み用紙を記入してもらった。

b 講演者への依頼

深尾昌峰さん（以下深尾氏）の依頼はメールで行い、当日、講演の時間程度は空いているということだったので、忙しい中にもかかわらず協力をしていただけた。スタッフが一度直接会いに行き、講演会の流れを詰め、あとは、メールや電話のやり取りで当日を迎えた。講演会の趣旨や目的を話したところ、深尾さんが話す内容や資料を用意してきていただけるということになった。また、当日は車でこられるということだったので、車輛入校の手続きを学生センターにて行った。

c パンフレットの制作

パンフレットには当日のタイムテーブルや深尾氏の紹介、討論時や自分の考えを明確化するために使っていただくメモ、また、アンケートをはさ

むことにした。講演に行ったことが参加者のより記憶に残るように、保存しなくなるようなパンフレットを意識して制作を行った（資料2）。

d 会場

会場は、今回のガイダンス会場である多目的ホール3で行い、参加者が入りやすいように、また、参加者が遅れて入ってきても、講演者の気にならないように設営を行った。ホワイトボードを用意し、講演のタイトルを書いて前に出し、講演の際により説明しやすいように使用してもらった。また、会場の外に、「深尾昌峰氏講演会ボランティアって？NPOって？」と大きく書いた紙を張り出し、当日、通りがかった人にも興味を持ってもらえるようにした。

e 広報

第2回ガイダンス全体のチラシとセットにして、講演会のチラシを今回も産業社会学部の基礎演及びコア科目で配布した。また、今回は全学部を対象に行うため、他学部も一緒に受けている一般教養科目などでも、直接教授にお願いをして配布をさせていただき、スタッフそれぞれが所属する別団体や友人などにおいても宣伝を行った。また、貼りビラは全学部に行い、前日から学内のいたるところでビラ配りを行い声をかけた。興味を持って話を聞いてくれたりする人もいて勇気付けられた。

C Do

a 当日のスケジュールとスタッフの動き

タイムテーブルは以下のようにになっている。

- 8：30～ 集合
- 9：00～ 会場設営
- 12：00～ 宣伝
- 16：10～ 講演会開場
- 16：40～ 講演会開始
- 17：20～ 講演会終了、質疑応答

17：25～ グループディスカッション開始

17：45～ 終了

b 詳細

今回のガイダンスの最初の企画ということで、ガイダンスの勢いをつけられるかどうか、何より、事前申込者が見込んでいたより少なかったため、成功するかどうかという大きな不安を抱えて当日を臨むこととなった。

初日ということもあり、会場の設営を一からしなければならず、思った以上に時間がかかってしまったが、担当のスタッフ同士で最後の確認などをして、落ち着いて企画開始ができるように、やらなければならないことを消化していった。備品として、リアカー、机、椅子を第1体育館から、またマイクやTV及びビデオデッキを借り、設営を行っていたが、マイクのアンプがないというハプニングもあったが、スタッフの知人を介してマイクとアンプをお借りすることができた。第1回目と同じように、室内の装飾なども行い、また、パンフレットの印刷など、みながそれぞれに仕事を見つけて動いていった。全体の設営が大体終わったら、より多くの人に参加してもらおうと広報活動を積極的に行った。

深尾氏が見えて、講演会開始時間まであと少しとなったが、ぎりぎりまで広報活動を行い、会場に来ていただいた方からパンフレットを渡し、「ボランティアに対する今のイメージ」をパンフレットのメモ部分に書いてもらい、開始を待ってもらった。ある程度の人数がそろった所で講演会は始まった。まず、挨拶を行い、タイムテーブルを確認し、深尾氏にバトンタッチをした。企画したはずのスタッフ一同も、公演中は参加者と同じ気持ちになり、多くのことを学ぶことができた。

グループ討論（意見交換）においては、4つに分けたグループにスタッフが入り、参加者のこれまでの経験から来る想いや、今日参加して考えたことなど、いろいろなことをざっくばらんに話すことができた。参加者同士で、活動の刺激を受けあい、また、今から始めようと思っている人へのアドバイスなどが交わされ、とても意義のある場となった。最後に司会が感想を述べ、深尾氏に挨拶をしてもらい、とてもいい雰囲気の中で企画を終えることができた。

c 広報

事前に参加確認が取れた参加者が少なかったこともあり、当日は朝、1限が始まる前にスタッフが集まってビラ配りを行った。当日用に、『6/30 16:30~ 以学館地下にて NPO事務局長 深尾昌峰氏講演会 「ボランティアって? NPOって?」』と大きくかかれ、ぱっと見て内容がわかるようなチラシを制作しており、それを大きく声をかけながら、昼休みや設営後など、授業の間を縫って、人が多いときに集中して配った。自分からチラシを貰いに来たり、内容を説明すると、「行く行く」と言ってくれた人たちもいたが、なかなか参加には結びつかなかった。しかし、企画自体を知ってもらったり私たちの活動を知ってもらうという意味で、こういったできる限りの広報は必要だと感じた。

D See

もう少し事前から講演会の内容を煮詰めて、話し合うべきであったということが反省点としてあがった。というのも、今回の講演は大変すばらしい内容であったが、見込んだよりも集客が少なかったから、もっと多くの人に聞いて考えてもらうには、スタッフが講演者に内容のほとんどをお任せしてしまうのではなく、どうしたら集客につながるか、みんなが参加したいと思うか、ということと一緒に考えて話し合わなければならないからだ。

集客については、そのほかの原因として、広報が不十分、設営に時間を取りすぎて、当日の会場に閉鎖性があった、時間帯(新入生の授業の関係)などが上げられる。設営に時間をとって、本来なら、多くの団体のビラを自由閲覧できる時間が多くあったはずなのにそれがなくなってしまったことも大きな反省点である。設営については、やり方などをレジユメ化して全員で把握して動けばよりスムーズであったと思われる。

しかし、評価点として、「是非」と思って聞きに来てくれた参加者により少人数ならではの内容の濃い講演会にすることが出来たし、参加者からも参加してよかった、等の声を聞くことができた。また、ただの講演会でなく、最後にディスカッションを付け加えたことにより、そこでボランティア仲間を発見する場の提供ができたことは評価すべき点だと思う。そう

いったことから、「講演会というコミュニケーションの場」が持つ力を感じることができ、より質の高い講演会をまた開催したいという思いが掻き立てられた。

(文責：山本佳菜江)

3) 体験班「やってみたい！！を体験しよう」

身体介護体験

7/1 13:30～18:30 以学館援助技術指導室

ノートテイク・要約筆記(OHP)

7/2 16:30～19:00 以学館多目的ホール3

車椅子体験

7/2～7/3 13:30～18:30 以学館多目的ホール3

高齢者体験

7/2～7/3 13:30～18:30 以学館多目的ホール3

A Plan

a 企画目標：「普段出来ないことを体験してもらう」

私たちが担当する「体験」という分野から全学部を見た場合、産社はまだ経験者の多い学部と言えるが、法学部や文学部などは学部の環境から見て、経験者は少ないと考えられる。そこで私たちは、企画の目標として普段の生活ではまず体験しないだろうという事を多くの学生に体験してもらうということにした。

b 身体介護体験

まず重要であったのが部屋の確保である。多くの方にリアルに体験して頂くにはある程度広い部屋で、尚且つ介護体験に必要な器具(ベッド等)が利用できる場所が必要であった。そこで私たち体験班が目をつけたのは、以学館1階にある援助技術指導室 である。それほど広いというわけではないが、ベッドもあれば介護用のお風呂まで備わっているので、この企画には打ってつけの場所であった。広さに関しては、中でのローテーション

を上手く調整すれば問題ないということで、さっそく実習指導室の先生方に協力をお願いをしに行ったところ、快く了解してくださり、部屋を借りることができた。

c ノートテイク・要約筆記（OHP）

ノートテイクというのはただ単にノートを書くというものではなく、それ特有の技術と知識が必要となる。そこで私たちは、京都市にある要約筆記サークル「かたつむり」から講師の方をお招きし、簡単な体験学習会のようなものを開くことにした。まずは代表の方に電話連絡し、その後は連絡を引き継がれた方とメールでのやりとりとなった。事前にすばらしいレジュメを送って頂いたり、当日に使う資料やOHPを手配して下さったりと、私たちとしては思ってもいなかった良い条件の中で進めることができた。全て協力して下さった「かたつむり」の方々のおかげである。当日は、西原泰子さん、柳田和子さん、長島智代さんの3名の方にお越し頂いた。

d 車椅子体験

この企画については、始めから実習指導室から車椅子を借りる予定にしていた。

実習指導室の先生方も全面的に協力して下っていたので、それほど苦労することなく、車椅子を確保することができた。車椅子を借りることより、当日の体験コースについて、何回も議論を行った。平日に行うということで、一般の学生の方とぶつかってけがをされるという事態も想定し、安全かつ車椅子での以学館生活をより実感して頂けるように、コースを考えた。

e 高齢者体験

高齢者体験に必要な器具に関しては、全て実習指導室から借りられるように手配し、当日のコースは車椅子体験と同様安全かつ高齢者の世界をリアルに感じて頂けるよう、コースを考えた。

B Do

当日のスケジュール

a 身体介護体験

お風呂体験：最新ハイテクお風呂で介護される側を体験。参加者のみなさんはこのお風呂の機能に感心されているようであった。介護用のお風呂をさわるという経験は、普段の生活の中ではできないことなので、良かったと思う。

ベッド体験：介護用ベッドを体験。簡単な介護技術もスタッフがわかる範囲で説明する。

食事介護 & アイマスクをして食事をしてみよう！！：目隠ししてご飯を食べる経験なんて、ほとんどの人がゼロなのではないだろうか。見た目ではない、味とにおいだけで感じる食事に、みなさん戸惑っておられるようであった。

b ノートテイク・要約筆記（OHP）

この企画は、以学館地下にある多目的ホールで行った。構成としては大きく2つに分かれており、前半はノートテイク、後半は要約筆記(OHP)という形で行われた。

まずはそれぞれの説明からしていきたいと思う。

まずノートテイクであるが、この言葉を知らない学生も少なくないのではないだろうか。身近なことで説明すると、大学の講義などで耳の聞こえない方がおられた場合、先生の話している内容が全く分からず、講義そのものが理解できないという問題が生ずる。そういった問題を無くすべく、ノートテイクという方法が用いられている。名前の通りノートをとるのだが、私たちが普段書いているノートとは違うということを理解して頂きたい。何が違うのか、それは話している内容（雑談を含む）を全て書き取るという点である。私たちのノートは必要なポイントだけであったり、先生が黒板に書いた内容だけであったりする。だからこそ、ノートテイクには技術と知識が必要となるのである。

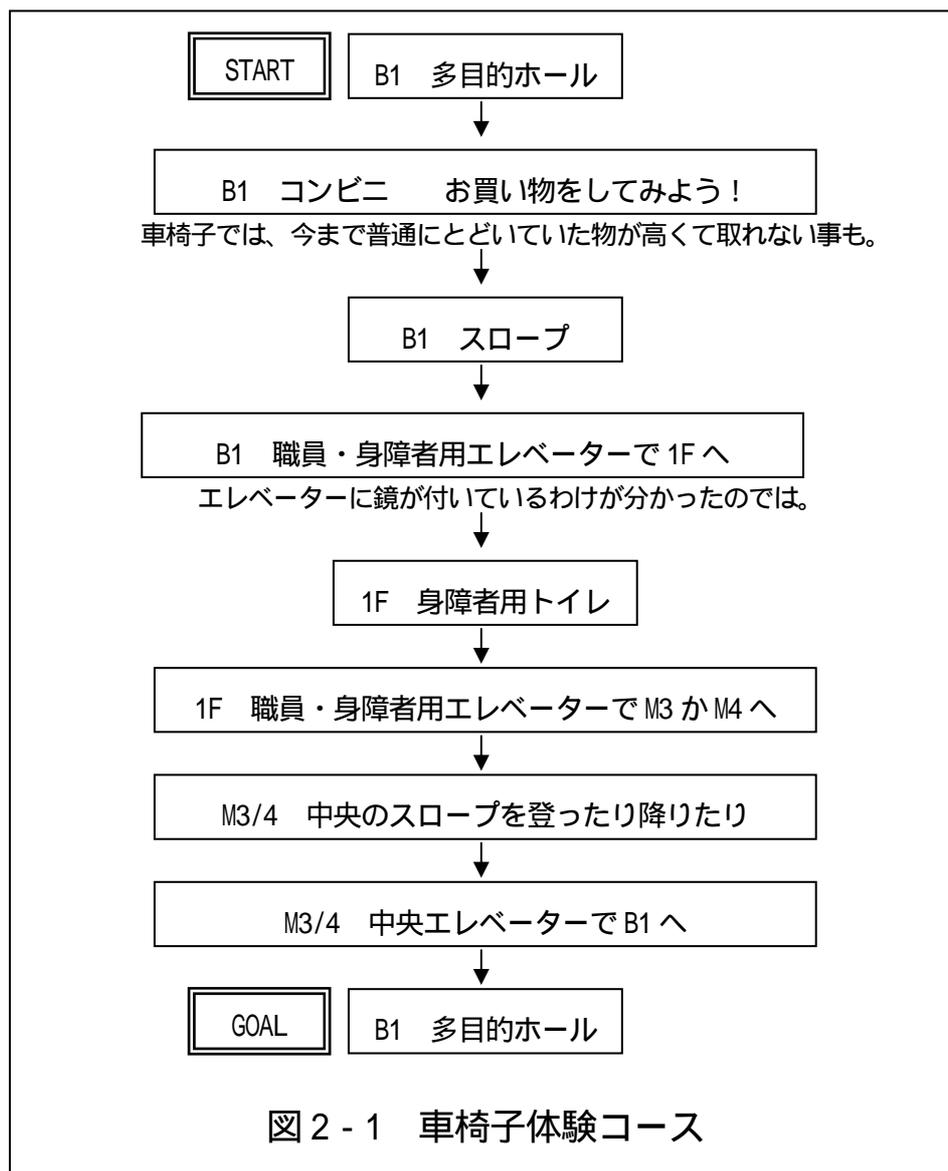
次に要約筆記(OHP)（以下、OHP 要筆）について説明したいと思う。要約筆記ということで、誰かが発言した内容を漏れなく書いていくという点は、

先ほどのノートテイクと同じであるが、このOHP要筆はノートテイクとは方法が異なる。名前を見ても、「OHPって何だ?」と思われた方も多かったに違いない。O(オーバー)H(ヘッド)P(プロジェクター)は透明なセロハンに下から光をあて、スクリーンにそのセロハンに書かれていることを映し出すというものだが、元々は既に書かれたセロハン資料を映し出すためだけに使われていた。しかしこのOHP要筆は、何も書かれていないセロハンに直接OHP上で要約筆記を行おうというものである。

では以上のことを踏まえて具体的な内容について述べていきたいと思う。初めに講師である「かたつむり」の方から簡単な自己紹介と各種説明が行われ、ノートテイクでは参加者全員に紙を配り、講師の方が文章を読み上げ、どこまで正確に書き取ることができるかという体験学習が行われた。話した内容を一字一句正確に書き取るのは物理的に不可能であるので、うまく要約しなければならない。ノートテイクには聞き取る力と要約する力が求められるので、慣れていない参加者には難しい作業であったように感じられた。OHP要筆では、今度は参加者全員にロール(セロハンを筒状に巻いたもの)を配り、セロハンに字を書くという体験を行った。

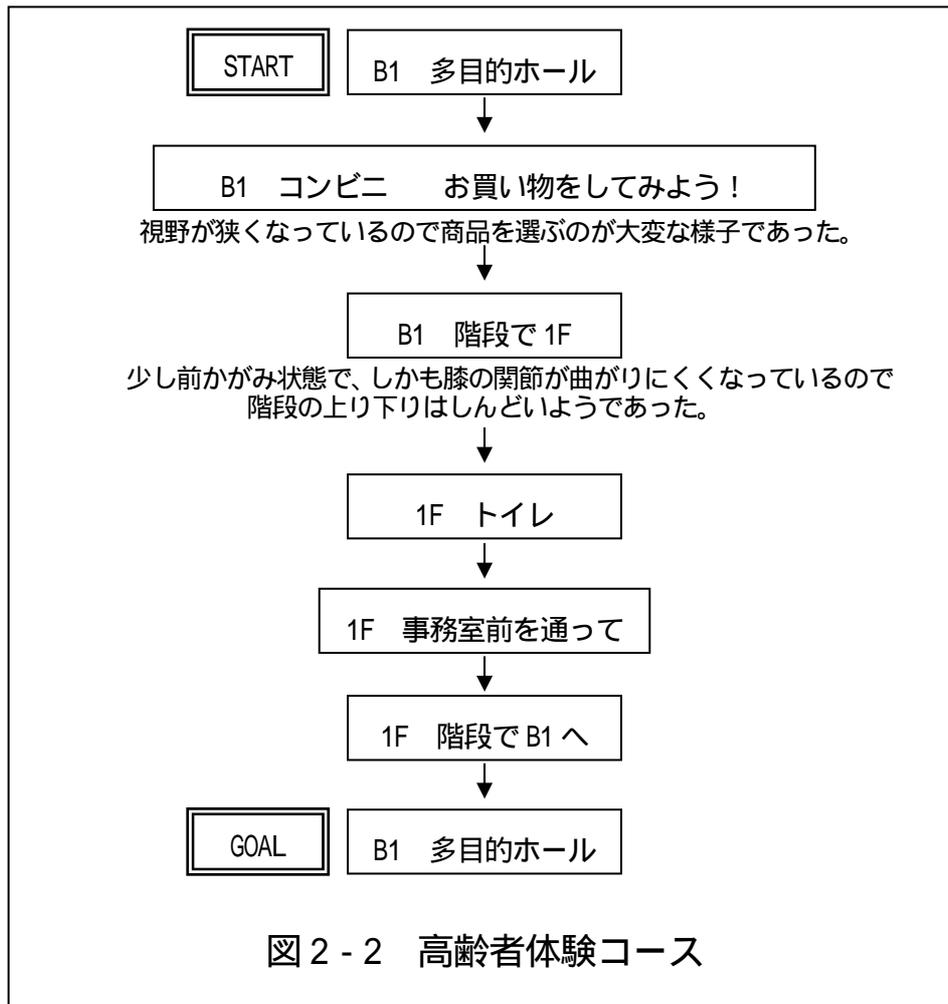
c 車椅子体験

以学館地下1階にある多目的ホールをスタート地点とし、こちらが用意した以学館内のコースを2人1組で回ってもらうというもの。以学館はある程度バリアフリーを考えて建てられているので比較的車椅子で移動しやすくはなっているが、それでも普段の生活では見えて来なかったバリアが多々存在する。その事を体験し、理解してもらう事がこの企画のねらいである。体験して頂く前に、車椅子の使用方法和注意点の説明を行った。体験コースについては下の図を参照して頂きたい(図2-1)。



d 高齢者体験

この体験を通して今の若者が高齢になった時の体の感覚を肌で感じていただくと同時に、高齢者として見る世界、(キャンパス内の環境・周りの人の視線など)を感じていただく事を目的として行った。この高齢者体験はスタートまでの準備が大変で、身につける器具がたくさんあった。まず効き足に靴型のサポーターをつけ、同じ足に膝サポーターと錘をつける。上には上半身ベストを着、ポケットに錘を入れる。利き手の肘にサポーターをつけ、同じ手首に錘(小)を巻く。耳栓を両耳に入れ、ゴム手袋 白手袋 手のサポーターを順番につける。めがねをかけ、利き手でないほうの手に杖を持ち、これで準備完了である。体験コースは車椅子体験と同様、事前に私たちが用意したコースで回って頂いた(図2-2)。



C See

この体験班の企画は、なるべく多くの学生に参加してもらおうという趣旨で行った。参加してくれた学生の数だけ見ればさほど多くはなかったし、介護体験にも車椅子にもノートテイクにも参加してくれたリピーターが多くいることを考えると、「いろんな学生に」という目標についてはあまりいい結果だったとは言えないように思う。それだけ PR やみんなの関心を引き付けるとするのは難しいということである。

しかし、参加者が多くなかった分、参加してくれた人への対応はきちんとできていたように思う。特に介護体験では、部屋が小さいのであまり来られても対応しきれなかったと思う。お風呂介助にしても、ベッド介助にしても、余裕を持ってしっかり説明できたので体験した方も満足して頂けたようであった。

高齢者体験や車椅子体験も取り入れて良かったと思う。このような体験

というのは、自分からお願いしてまでやろうとは思わないし、気軽に体験できる場というのも少ないのが現状であるように思う。そういう意味では、とてもアットホームな雰囲気の中でできていたし、参加者が多くなかったので毎回スタッフが付いて回ることができた。スタッフが付くことで、やりっぱなしで終わるということは避けられたのではないだろうか。

ノートテイクに関しては自分が思っていた以上のできとなった。参加者も空席がたくさんできたら講師の方に申し訳ないのでかなり不安だったが、いざ始まってみると、用意した席がほぼ埋まっていい形で始めることができた。内容も講師の「かたつむり」の方がすばらしいものを用意して下さったので、参加者もいい勉強になったと満足して頂けたようであった。

(文責：三井貴浩)

4) ボランティアブース

A Plan

a 企画内容

ボランティアブースの企画は、ボランティア団体やボランティアサークルのブースを設置し、ボランティアに関する質問や具体的な活動内容を直接聞くことができるというものである。またチラシコーナー、案内、フリースペース、子育てビデオの上映を同時に行った。

b 企画意図

この企画は大きく分けて3つの目標を立てた。ボランティアに関する「情報提供」の面で適切なサポートができる場にする。

具体的な意図としては、次のように挙げられる。ボランティアをしよう、したいと思っている学生が、興味関心のある分野や活動先を見つけ実際にボランティア活動により近づけるようにする。また、受入側の情報を把握し、学生のボランティア活動先への不安を取り除く。ボランティアに関する知識・関心をあまり持っていない学生が、具体的な活動を知ることによってイメージや理解を深める機会にする。求められている情報が、求めている学生へつながるように、ブースやチラシの多様さ・分野の幅広さ・活動形態

の柔軟さを充実させるとともに、総合冊子を作り、アドバイスや案内も必要に応じて行う。

c ボランティアセンター設立プロジェクトとしてのスキルアップ

総合案内・相談ブースを設け、学生がどのような情報やサポートを求めているのかを実際に知ることで今後の課題を明確にし、研究開発を進める機会とする。また、ボランティアコーディネートのスキルアップを図る。

d ボランティア受け入れ団体・施設・個人とのネットワークを作る

受入側のスタッフの方との連絡・調整をきちんとする。プロジェクトの今後につながるように、関わりを持った受け入れ先の情報を管理できるようにする。

B 事前準備

a 依頼文書作成

学内サークル向け、学外団体向けの依頼文書の作成を行った。ボランティアセンター設立プロジェクトの意図とこの企画の説明、依頼内容を文章にした。

b ボランティア受け入れ先

当日のブース出展に参加を依頼する団体やサークルを探した。学内では、1回目のガイダンスに参加してもらったサークルやプロジェクトメンバーの知り合い、学内のサークル情報から選んだ。学外団体は、インターネットを利用したり、ボランティアコーディネーター養成講座修了者の組織である RitsVC のネットワークに宣伝をお願いした。

c 依頼

分野の調整などを考慮の上、依頼を行った。依頼文は FAX や手渡し、E-mail で、返答用の別紙と、参加の是非に関わらず今後のボランティア情報提供を希望する団体の情報シートを同時に付けた。また、チラシコーナーに用意するチラシのみの協力も求めた。この作業から学外団体担当と学

内サークル担当に分けて準備を進めた。

d 返答・打ち合わせ・資料依頼

E-mail、FAX、RitsVC のつながりでの返答があった。参加・チラシ協力の可能な団体には、折り返し当日の諸連絡や資料の事前送付をお願いした。

e 会場・必要備品確保

学生センター及び学部事務室へ、会場の確保と備品の貸出依頼を行った。机、椅子、テレビデッキなどが挙げられた。

f 冊子作り

当日来た学生に、出展団体の簡単な紹介文や配置図を載せた冊子を配り、各自のねらいに合うように工夫した。これも今回の改善点である。

g 会場準備物作成 - 三角柱・ネームプレートなど -

前回との改善点として、三角柱やネームプレートの準備を行った。また三角柱とは別に、会場の中でどの団体のブースか一目でわかるように、団体名を大きく書いた紙を用意した。ゆっくり会場に居れるように、一口菓子を用意し、ハーブティーを趣味とするメンバーがお茶と湯のみ、飾り付けを担当した。

h 広報用チラシ作成

ブースのみのチラシを作成した。裏に全日程を刷ったものもあった。目立つようにすることと、堅苦しいイメージにしないことに気をつけて作成し、どんな分野のボランティアが集まるのかを記した。

i 広報

時期の早い段階では、全プログラム共通の広報として行った。学部と交渉し、学内の公的行事としての看板作成を業者に依頼し、正門・東門にひとつずつ配置した。1回生全員が受講する科目の担当教授にお願いに行き、説明とチラシ配布を行った。また、ボランティアコーディネーター養成講

座にも行き宣伝をした。また、ひとまち交流館にもチラシを置かせていただいた。プログラムが始まってからは、朝の校門前や図書館前などでチラシを配布して呼びかけた。ブース出展の前日・当日などは、専用のチラシを校舎前など学内の随所で配り呼びかけた。ダンボールに内容を記し、何度か学内を呼びかけて回った。なるべくさまざまな学部の学生に知ってもらおうとしたのが特徴である。以上が広報についてである。

j 情報シート、チラシ類のファイル整理

今回の特徴は、外部団体を含め多くの団体やサークルから、出展やチラシでの協力が得られたことである。このネットワークを活かすため、集められたチラシや、情報シートを確実にファイリングし今後の活動に利用できるよう整理した。

C Do

a 配置

ブース出展が始まるまで、チラシコーナーとビデオ上映は行っていた為、まず事前に作っておいた配置図を見ながら配置転換を行った。

b 出展団体の対応

団体の方を迎え、準備を進めていただいた。参加者の少ないブースへは、スタッフが話しを聞きに行くなどして関わりを作った。

c 参加学生への対応

学生が入り始めたら、受付・案内・記録写真などに分担した。入場者の数が少ないうちは外でチラシ配りも行った。メンバーの中には、どんな分野に興味を持っているのかを聞くなどして対応していた。アンケートが貴重なデータになるので、記入スペースをとり記入を呼びかけた。

D See

ブース企画に対する学生側の反応が良く、参加人数も多かった点を考えると、学生が直接ボランティア団体・サークルの話を聞く場を提供できた

ことが評価できる。しかし出展団体からは、学生の人数の少ない、学部の偏りがあるという声もあり広報方法の改善が求められる。また、受入側の出展意図によっては、ボランティアを増やしたいという思いがあるのも無視できない。大きな課題となったのは、人気のあるブース、ないブースの差が大きく出てしまったことであり、ボランティア内容の多様化が裏目に出た点でもある。具体的な作業の反省としては、準備期間が短く、団体との連絡がぎりぎりに進んでしまったことである。役割分担し効率的に進めた点や、団体の資料やチラシを管理できたこと、当日配る小冊子の作成やチラシコーナーなど参加者の立場に立った企画立案ができたことは今回の大きな改善点である。このブース企画で作った学生や団体との関係を継続していくことができれば、更に意味が高まったように思う。

(文責：中尾咲代子)

第3章 ボランティアセンター設立に向けての マネジメント

ボランティアセンター設立に向けて私たちが行った事をマネジメントという観点から、運営していく為に必要な仕組みなどを中心に論述していく。立命館大学にボランティアセンターの設立を目標としたこのプロジェクト。発足時点の特徴として、「ボランティアコーディネーター養成講座」が大きく関わってくるわけだが、メンバー間の交流やボランティアセンターに関する知識などはほとんどなく、ゼロからのスタートであったと言えるだろう。

前述しているが、ボランティアガイダンスといった大きな取り組みなどを開催する事が出来たのはボランティアセンター設立に向けてのマネジメント、(マネジメントする上での必要な資源である「人・もの・金」のつながりやプログラムを実行するために必要な「Plan-Do-See」のプロセス過程とその効果)がうまくいったからだといえるだろう。ボランティアセンター設立には辿り着いていないが、現時点までの、物事をスムーズに進めていくための手順、取り組みに対するモチベーションを高める手段、運営をスムーズに行う方法などを、これから報告する。

第1節 ボランティアマネジメントとは - 二つのガイダンスから考える

1) マネジメントの本質

マネジメントとは営利組織のために体系化された知識であり技術であるが、今日では全ての組織が必要とする体系である。体系としてのマネジメントをはじめて確立したP.ドラッカーは、60年前にアメリカのGM社のマネジメントの研究をすることからスタートして、企業におけるマネジメントを体系化した。ドラッカーによれば、『マネジメントの役割は「共通の目標と価値観、適切な組織構造、教育訓練と自己開発の力によって、人々が何ごとかを成し遂げるためのもの」で、この役割は何十年も前から変わってないし、適用されるのが営利組織であっても非営利組織であってもなんら変わることはない』という。

2) ボランティアマネジメントの三つの視点～「人・もの・金」より

4月にボランティアセンター設立プロジェクトが発足し、今日まで様々な事がありながらも、一つ一つの課題に向けスタッフ全体で取り組んで来たように思う。第1章に記載したように、一つの組織を運営し成功させるためには、その組織を体系化し、マネジメント的価値観の下で取り組んでいく事の必要性が挙げられていれる。私たちボランティアセンター設立プロジェクトを組織として考えた際、この組織を運営する為のマネジメントがどのような流れの中で行われていたのか。マネジメントするうえで必要な「人・もの・金」の三つの要素を振り返り、この三つの視点からボランティアセンター設立プロジェクトの一年間の取り組みを考察する。

A 「人」の流れ～関係作り

ボランティアセンター設立プロジェクトのメンバーは、ボランティアコーディネーター養成講座四期生を中心に活動している。それぞれのグループでボランティアコーディネートスキルを学んだ私たちは津止教授の呼びかけに賛同し、このプロジェクトが発足した。14名のメンバーで構成されており、多くのメンバーが産業社会学部人間福祉学科に在籍している。最初は顔見知り程度だったが、週一度の定例ミーティングに加えてのガイダンス前にほぼ毎日行ったミーティングや通算200通超に及んだメールリングリストなどを活用する事で、関係も深まり団結力も日を追うごとに増していった。飲み会やBKCで行った合宿なども深い人間関係を語る上では外すことはできない。ボランティアセンター設立に興味関心のある者で構成された団体なので、共通の目標と価値観を高めていける要素は各々持ち合わせていたように思う。自分の意見を持ち、自己主張できる関係が作れたからこそ、お互いを高めあいながら充実した関係を築けたのだろう。

B 「もの」の流れ、情報の共有

ミーティング

全体で34回のミーティングを重ねた。

ホワイトボード

参加出来なかった人に対してわかるようにホワイトボードに記録とし

として残す。当日の動きが分かるように「シフト表」を作成し、役割を決めた。それをホワイトボードに張り、他の班の人も見れるようにした。

メーリングリスト

毎回感想などを送り情報や意見を共有した。

議事録の活用

ミーティング内容を忘れないように記録者がメモをとり、いつでも見ることができる議事録を作成した。

ネームプレート

ガイダンス当日にスタッフの名前がわかる様にネームプレートを作成した。

会場設営

ガイダンスに参加しやすいよう、ポラロイドカメラや飾り付けを工夫し会場の雰囲気のアットホームな感じに作り上げた。

立て看板

大学に申請し正門と東門に設置した。(第2回ガイダンス)

メールアドレスの作成

あらゆる機関の連絡調整の徹底を図る為にボランティアセンター設立プロジェクトのメールアドレスを作成した。(第2回ガイダンス)

C 「金」の流れ

主に使用したお金は次のようなものがあげられる。 場所の確保、装飾代、 通信費、 コピー代、 交通費、 保険料、 謝礼金、 助成金

3) 三つの視点から考える相互関係

これらの3つを有効的に活用することがボランティアセンターをうまく機能させるためには不可欠である。いかにこの3つをうまく循環させるかがキーになってくると思われる。「人」に関しては、私達はリーダーという人物はいなかったように思う。それぞれの個を大事にしていき、お互いの役割が見えてきたからである。それは、営利目的の企業ではない強みかもしれない。よって、今後もこのような関係でありたいと思う。

「情報」は、常に皆に情報が行き渡るように考慮しメーリングリストや

ホワイトボードの活用を行った。議事録に関しても、いつでも見ることができるように一つのファイルにしまうなどの工夫がみられた。このように情報を共有することは、いつでも自身のモチベーションを高められるという点で有効であった。また、ネームプレートの作成では自らがスタッフの一員であることを改めて感じる事ができた。「情報」に関してはうまく機能していたのではないだろうか。

「金」では、助成金を申請し5万円を補助してもらうことができた。支出に関しては、コピー代や謝礼金等があげられる。また、センター設立に向けて数回の合宿を行ったが、その際の飲食代や場所代等も含まれている。私達は「会計」という役割を設けて活動していたが、実際うまく機能していたかどうかは疑問である。そこで、今後は「会計」の人にきちんと予算や毎回の使用金額等を聞き、自身も把握しておかなくてはならないと感じた。

今このプロジェクトは動き出したばかりであり、3つの相互関係を鮮明に見ることは難しいが徐々に明確になってくるものと思われる。

また、この3つが目標に向かってうまく循環するには、スタッフのミッションとビジョンを明確にしなければならないことはいうまでもない。

第2節 プロジェクトマネジメント - Plan Do See の効果

1) ボランティアガイダンス 12 のプロセス

私達の行った過去二回のボランティアガイダンスをマネジメントという視点から考えてみると次のような10項目の手順によって運営されていた。

- プログラムの計画とリソース
- ボランティア活動の設計
- 募集・広報活動
- スタッフのトレーニング
- ボランティアとスタッフの関係作り
- コーディネーション
- スーパービジョン

評価
認知
記録と報告

5月に行ったボランティアプレガイダンスの事後ミーティングで、
、
、
に関して不十分だという見解があった。そこで7月のガイダンスではそこを重点的に見直し、各自役割を明確化していった。

なぜ がうまく機能しなかったのかということ、プログラムを参加者主体ではなく開催者主催の視点から運営してしまったからである。そのため、参加者がどのようなボランティア活動を望んでいるのか、ガイダンスとしてそのようなスタイルが望ましかったのかということをきちんと把握し調査していなかった。それは、初めてのガイダンスということもあり学生の意識を深く掘り下げられなかったからである。そのため、7月のガイダンスではアンケートをもとにしながら、多種多様なボランティア団体に呼びかけることにした。これは次に述べる に関係している。

の補強としてボランティア分野を国際・児童・障害者・環境・高齢者に広げ、ボランティア活動希望者が入りやすい空間作りに努めた。分野を分けることによってボランティア活動が広がりを持ち、ボランティア＝福祉というイメージとは違ったものとなったのではないだろうか。

に関しても見直しを図ろうということになり、授業科目での広報の他に、7月のガイダンスでは立て看板やビラ配り、HPで宣伝されるなど活動の幅を広げることができた。また、従来のスタッフ以外にアシスタントを入れてはどうかという提案がでた。その結果3名の新しいスタッフを現ボランティアコーディネータープログラム受講生から迎え入れた。人手不足に悩まされていた私たちにとってこの3名の存在は大きかったように思う。そして産業社会学部の生徒だけでなく他学部の学生への広報活動にも力をいれた。他学部の授業に参加しての広報活動は難しかったが、立命館大学広報課によるHPの記載やクレオテックの立て看板の設置は他学部学生の参加に大きくつながっただろう。

のトレーニングでは、数回のミーティングで自らの経験や活動を報告しあい、モチベーションを高めた。その上、コーディネーションの力を少

しでも高めたいという思いから数人の学生のボランティア活動コーディネートをを行った。しかし、トレーニングは日々の活動から培われてくるものなので今後も継続してコーディネートを行いたい。これは にもつながる。

に関しては、スタッフ一人一人の役割を再確認しボランティア活動希望者が新しい発見ができるように又受入側とのニーズがマッチできるように配慮した。しかし、今後の気をつけるべき点として次のようなものが挙げられる。

ボランティアが何らかのトラブルに巻き込まれた場合の対処
ボランティア同士が何らかの問題を起こした場合

これらを解消するには第3節で述べる「リスクマネジメント」を頭に入れておく必要があるだろう。

のスーパービジョンであるがボランティアコーディネーター養成講座の方々を始め、産業社会学部津止教授の指導の下活動を行ってきた。

の評価としては、ガイダンス後のアンケート用紙から行った。5月のガイダンスのアンケート結果からは十分な評価が得られなかったのではないかと判断し、アンケート項目を増やし考察を行った。評価をすることは、ボランティアセンター事業をステップアップするためのアクションプランであることに間違いはないだろう。

の報告としては2月産業社会学部ゼミナール大会で発表をし、講評をもらった。

2) 第1回ボランティアプレガイダンスから 第2回ボランティアガイダンスへ

4月30日、5月1日に第1回ボランティアプレガイダンスを開催した。手探り状態から始まったこの企画は14人が一斉にボランティアプレガイダンス開催という一つの目標に向かってスタートした。役割分担もとくには決めておらず、開催当日も全員がコーディネートをを行うという雰囲気だった。この際の人々の動きの反省点として役割分担は必要だという事が決まり、その意見は第2回ボランティアガイダンスに生かされた。

第2回に際しては、講演班・体験班・ブース班に分かれ各自の役割を明確化していった。各自の役割を明確化することにより、その企画をどうしても成功させたいという思いがよりいっそう強まり前回よりまして気合が入ったように思う。これは、ただ漠然と一つの目標に向かうのではなくより目標を明確化した上で、そのプランを立てていくという方法が功を奏したのであると考える。具体的には、次のようなプランがあった。

A 講演班の場合

ボランティアガイダンスの講演会はガイダンス初日に決まった。講演班は、ボランティアガイダンス・講演会の参加者に何を伝えどんな事を得てもらいたいかという、最終的な目標決めから始めた。話し合いの結果、参加者の方に従来の滅私奉公的な「ボランティア」という否定的なイメージを払拭するような新しいボランティア観を確立してもらうことを目標とした。メンバー自身、一年に及ぶボランティアコーディネーター養成講座の授業を受けてきて、ボランティアに対するイメージが変わりボランティアそのものもつ可能性や明るさ、そして魅力的なものである事を私たちは学んだからだ。そこでテーマをボランティアに対し余り関心の無かった人でも参加できるようにと、「ボランティアって何？NPOってどんなもの？」に決定した。次に実行にあたっての講演者選びである。私たちは、養成講座の客員教授で招かれていた「きょうとNPOセンター事務局長・深尾昌峰氏」にお願いする事にした。深尾氏の授業は魅力的でありどこにでもあるような事例を取り上げながら講義していく手法が参加しやすい講演会になるのではと考えたからだ。時間配分を決める段階で講演を聞くだけでなく講演会参加者の振り返りの時間をつくろうという意見が挙がり、講演会のあとにグループディスカッションの時間を設けた。そこで参加者同士が意見を交える事で自分の考えを確立させるきっかけ作りになると考えたからだ。

B 体験班の場合

ボランティア活動をする場合に必要な知識を体験から学んでもらおうという思いから、「高齢者体験」「ノートテイク体験」を実施することにした。

「高齢者体験」では、実習指導室から、機材を借りた。具体的には車椅子や高齢者キットなどを貸してもらい参加者に車椅子を使って校内を回ってもらったり、重い服を着て高齢者がどのような状態になるのかを体験してもらった。「ノートテイク体験」では学外から講師をお呼びし、ノートテイクとはどのようなものか講義形式の体験をしてもらった。学生が実際にノートテイクのコツをつかむことができたのではないかと思う。

スタッフも参加者に器具の説明をする必要があるため、事前にオリエンテーションを行った。そこで、車椅子の種類や乗り方、入浴装置の使い方を学んだ。これは「トレーニング」であると思うがスタッフ自身が新しいことを吸収することにより、より明確に知識を参加者側に伝えられることが分かった。最後に、アンケート分析をその日のうちに行い、どのような点が良かったか、また、改善すべき点はあるかなど意見を出し合った。体験講座により、参加者が実際に体験することでこれから始めるボランティア活動のイメージを少しなりとも膨らましてくれたのではないかと思う。

体験班による PDS 過程をまとめると、「何を体験させるか」という話し合い(Plan)から始まり「器具の貸し出し」「講師への交渉」(Do)へとつながる。最後に、ミーティングを開きアンケート分析へと至った。PDS 過程で良かった点は互いの意見を考慮しながら活動でき、自身の強みを活かしたことである。また、シフト表を日割りに作成したことにより個々の動きが分かったのが、ガイダンス中に役立つことができた。

C ブース班の場合

ブース出展は、実際にどんなボランティアがあるのか、直接受け入れ先の方と話ができる点が特徴である。講演や体験の企画でモチベーションを高めた学生が、より具体的にボランティアを理解し、活動に結びつけるための場であるといえる。ボランティアに興味のある学生が多くても活動につながらない大きな理由は、「きっかけがない」「情報がない」という壁である。ブースでは数種分野や活動先を具体的に知ることができるので、情報やきっかけの壁を壊す役目を持つ。第1回目で「サークル紹介になっていないか」という感想があったので、今回は特に学外団体にも依頼し、分野の幅を広げ、よりボランティアの見識を深める場を目指した。それを

意識しながらブース企画を作っていた。4人のメンバーがブース企画の担当を受け持った。まずはブース出展に参加してもらえるボランティア受け入れ先を探した。皆で同じことを進めるより分担を決めた方が効率的だと考え、RitsVC（ボランティアコーディネーター養成講座のOB会）、学内サークル、学外団体の3つの担当にわけて呼びかけを行った。依頼文書を作り、当日参加の可否・チラシ参加の可否を返答いただけるようにした。主にFAXやE-mailでのやりとりとなった。返答のあった団体の情報やチラシはファイリングした。同時に当日配布する小冊子や準備物、ブース単体のチラシを作成していった。当日は受付や学生の対応などに回った。細かな作業も多く、グループで連携し状況の把握をすることが重要なポイントとなった。ボランティアに興味を持つ学生が何を必要としているかを考えながらアイデアを出し合い、依頼をしたり、文書を書いたり、受け入れ先と連絡を取り合ったり、会場を作ったりしながらブース企画を作り上げていった。この経験を通して、私達スタッフ自身も多岐に渡る作業を知り、行動力を身に付けることができたと思う。

以上、ボランティアガイダンスを2回行ったから見えてきた取り組みや意識の変化を記述していった。第1回ボランティアプレガイダンスの振り返りや反省がより充実した第2回ボランティアガイダンスをつくりあげる事ができたのだろう。～のPDSの繰り返しこそが大切である。PDSのサイクルが経験や知識を得る事でより深みのあるサイクルにつながるといえるだろう。

次の節ではこれらの他に見落とされがちな「リスク」について指摘していきたい。そしてマネジメントの視点からどのようなものがあるかを述べる。

第3節 リスクマネジメント～ボランティアにおけるリスクとは

1) リスクとは

リスクとは一般に、「危機」や「危険」という意味を表す。リスクを「危険」という時には、「事故発生の可能性」、「事故それ自体」、「事故

の発生の条件、事情、状況、要因、環境」の三様の意味に近いと言われている。

リスクの概念の検討およびその分類を真正面から採り上げた最初の学者 Haynes によれば「リスクという用語は経済学の中ではなんら技術的意味を得てこなかったが、他の箇所におけると同様に、ここでは損害の可能性を意味する。偶然性という要因は、リスクと区別されるべき性格である。ある行為の遂行が有害な結果を生起するかどうかについての不確実性が存在する場合、その行為の遂行は危機負担である・・・」と述べている(注1)。

リスクは私達が目に見えないところで起こる可能性がある。例えば、事故が起こったとき予言者でもなければそれを予測することは不可能である。事故が起こってしまった要因は後から気づくもので、なかなか最初からリスク回避には至らないのではなからうか。

しかし、亀井利明は著書で「リスクの源泉は自然や環境の変化と人間の係わりにあり、意思決定の拙劣や決断の失敗にあると考えられる。また、それはなんらかの決定要因の欠如とも言える」(注2)と指摘したうえで、「人間がある状況や環境変化を完全に管理できるならば、そこにはリスクは存在しない。リスクは計画力、組織力、指導力、統制力といった管理の不足や不十分性から生じる」(注3)と述べている。

そこで、リスクを軽減させるために「リスクマネジメント」という方法がとられる。次に「リスクマネジメント」とはどのようなプロセスで行われるのかを簡単に述べたい。

2) リスクマネジメントとは

近年、リスクマネジメントという言葉は日常的に用いられるようになった。「危機管理体制」を問われる社会になっているのも事実である。

プロジェクトマネジメント協会によれば、リスクマネジメントとは「プロジェクトリスクの識別、分析、計画、追認、コントロールに関するプロセス。リスクの識別やアセスメント、分析をするプロセスであるが、これに、リスクの軽減や後期を促進するような先を見越す対応策の特定や導入が加わる。マネジメントプロセスとしては、計画した対応策の有効性の監視や分析評価事項を、対応策の挿入や時間の経過によるプロジェクト

環境の変化を考慮することによって継続的に更新することである」となっている。

つまり、リスクマネジメントは「リスクの把握」「リスクの分析」「リスクへの対応」「対応の評価」という一連のプロセスで行われる。このプロセスは、ソーシャルワーク過程と同様、問題解決のプロセスである。

3) ボランティア活動におけるリスクとその戦略

ボランティア活動におけるリスクには、ボランティアが「リスクを与える側」になる場合と、「受ける側」になる場合がある。

A リスクを与える場合

間違っただ情報・間違っただ行為、遅刻・欠勤などでボランティアを受ける側などに支障をきたしてしまう

相手にけがをさせてしまう

セクシャルハラスメントなどをしてしまう

言動などで心に傷を負わせてしまう

B リスクを受ける側

間違っただ情報・間違っただ行為などでボランティアの活動に支障を受けてしまう

ボランティアがけがをしてしまう

セクシャルハラスメントなどをされてしまう

言動などで傷ついてしまう

これらのリスクについて考えるときに重要であるのが、「リスクの等級分類」である。効果的なやり方として、ポール・S・ロイヤーは著書「プロジェクト・リスク・マネジメント」の中で次の4つの要因により等級付けを行っている。

- | |
|-----------------------------|
| I. リスクのカテゴリー |
| II. マイルストーンの達成に与える強度あるいは影響度 |
| III. 発生可能性 |
| IV. 発生時期 |

これはボランティア活動においてもまったく同じことがいえる。もし、ボランティア側の不注意で相手にけがをさせてしまった場合、リスクとしては非常に高い。発生頻度としては低いかもしれないが十分ありえることである。そのような、リスクの低 高を分類していくことが必要である。そして、リスクをどのように対処するのも考えなくてはならない。その場合の対処の方法として次のような戦略があげられる（注4）

a リスクを回避する

危険の多いプログラムは中止する、ボランティアではなくスタッフが活動する。

b リスクを受け入れる

危険をあらかじめ認識しうまく対応する、危険も含めてプログラムを企画する、リスクが生じたときの指示系統を決めておく。

c リスクを転じる

保険に加入したり契約を結んでおく、禁止事項を書類にしておく、予想されるリスクを考えて活動説明書の中にも記入しておく。

d リスクを縮小する

オリエンテーションや研修を行って、リスクを小さくするための知識やスキルを提供する。

e リスクを予防する

リスクが起こり得る環境を取り除く、場合によっては、複数でチームを組んでボランティア活動をするようにする。

上記の戦略を踏まえて、私達も「リスクマネジメント担当」を作ること
を提案する。しかし、一人だけがそれを担っていても本来の機能を果たさ
ないのではないかと考えるので、「リスク」と「マネジメント」の情報共有
が必要になってくるだろう。皆が一様にそれらを理解して初めてできるも
のだと思う。その上で、リスクのマニュアル作成に取り組んでいかなくて
はならない。組織としてリスクに取り組むことは非常に重要なことである。
そこで、先述したような「もの」の活用が再度積極的に利用されるべきだ
ろう。

先ほど「マニュアル作成」と書いたが単にマニュアルがあればいいとい
うものでもない。多様なリスクを柔軟に対応できるようにしておかなくて
はならないだろう。

第4節 ボランティアセンターマネジメントの課題と展望

上記にも述べているように ~ の PDS の過程は非常に重要である。こ
のの一つ一つのステップなしでは飛び石になってしまい中身のある濃い内容
にはならないからである。

私たちは二回のガイダンスと数々のミーティングにより身をもってそう
であるという事を実感した。ガイダンス開催中は、マネジメントしている
という実感はなかったが振り返ってみるとこのような過程が私たちを成長
させ、ガイダンスも好評だった理由であろうことに気づいた。

さらに、ある目標を達成する為には「目標によるマネジメント」が不可
欠だ。私たちは企業という何百人という社員がいるわけではないので、比
較的この統合は出来るのではないかと考えている。その統合のポイントは
以下のようなものがある。

組織理念と組織目標に対して個人理念と個人目標が「なるほど」と納得
できる

組織理念が常にメンバー全員に浸透している

リーダーに組織理念を的確ブレークダウンできる技能がある

目標設定にメンバーの『参画』がなされている

今後は上記のポイントと共に PDS 過程をスタッフ同士で共有化し、認知していかななくてはならないと思っている。そのためには、今後も行われるミーティングや議論の中で共有していきながら第 2 節で述べたような「もの」を有効活用していこうと思う。

また、今一度ボランティアセンターの理念を見つめなおし常に自分たちはどのような目的で動いているのかを意識し行動していく必要がある。目的意識の統一とボランティアセンター設立に向けての活動の明確化が、今の私たちの課題である。

4 月に設立したボランティアセンター設立プロジェクト。「マネジメント」という観点からやく一年の取り組みを振り返る事ができた。二回のガイダンスを開催したことは、ボランティアセンターの必要性を感じた結果となった。二回のガイダンスは有効であったと言えるだろう。だが、ボランティアセンターを設立に向かわせる為のボランティアガイダンス開催という一つの目的は達成されたかもしれないが、本来の目的であるボランティアをコーディネートするための機関としてはまだまだである。ボランティアをやりたい学生、ボランティアを必要とする存在、この二つの掛け橋となるコーディネート業務を実現可能にするためにも私たち学生スタッフ自身がもっともっと学ばなければならない。改めて、「ミッション」と「ビジョン」の明確化が必要になるだろう。

そして、私たち学生スタッフはいい仲間であると同時に刺激相手でもある。例えば、あるメンバーががんばっている姿を見ると「私も何かしなければ」という気持ちになる。この意識をずっと持ち続け、そしてお互いが一定の目標に向かって切磋琢磨するところにこそ真のマネジメントを成立させる大きな要素を担っていると思う。ボランティアセンター設立という目標に向かってお互いコミュニケーションを十分にとり、あらゆる資源を探りながらボランティア側のニーズを満たしたマネジメントをしていくつもりだ。

(文責：村端紗千・荒牧弥生・中尾咲代子)

【注釈】

- 1 亀井利明 『リスクマネジメント総論』 同文館、2004年、p29。
- 2 同書、p18。
- 3 同書、p19。
- 4 <http://www.alc.co.jp/com/vj/index.html> 「リスクマネジメント」

【参考文献】

ポール・S・ロイヤー 『プロジェクト・リスク・マネジメント』 生産性出版、2003年。

【参照 HP】

<http://www.alc.co.jp/com/vj/index.html>

http://www.arm.gr.jp/rm_nyumon/mokuteki.html

第4章 他の大学のボランティアセンターとの比較

1987年、大阪キリスト教短期大学（大阪市阿倍野区）にボランティアコーナーが、日本児童教育専門学校（東京都新宿区）にボランティアセンターが出来たのが、ボランティアセンターの初めであると言われている。その後、1991年に、関西国際大学短期大学部（兵庫県三木市）に、1993年には淑徳短期大学（東京都板橋区）にボランティアセンターが作られた。そして、1995年の阪神・淡路大震災により、関西学院ヒューマンサービスセンター（兵庫県西宮市）や神戸大学総合ボランティアセンター（兵庫県神戸市）が出てきた。その後は、この2、3年の間に設置したところが多く、様々な大学にボランティアセンターが出来ていく（注1）。

このような近年の大学内ボランティアセンター増加の背景には、「学生ボランティア」の多様な活躍が理由のひとつとして挙げられるであろう。時間に割合ゆとりのある大学生の可能性には限りが無い。しばしば様々な場で、大学生のボランティア活動は紹介され社会的にも評価されている。

一つ例を挙げたい。2003年8月、広島市平和記念公園の平和の子の像に置かれていた大量の折鶴がある大学生の行いで燃えてしまうという事件が起こった。この時、多くのメディアはこの大学生の稚拙な行動を批判し、「最近の若者は・・・」という世代批判を行った。この報道と同じ頃、この事件を起こした学生自身の大学のボランティアセンターは、「折鶴プロジェクト」なるものを結成し、多くの学生の力を集めて、原爆記念日までに1万2000羽もの折鶴を平和の子の像の前に捧げた。私は、同年8月6日（原爆記念日）に平和記念公園でこの折鶴を見た。一つ一つの折鶴に学生の思いが感じられ、学生たちの持つ熱い力の無限性を感じた。そして、それらの個々の力を集め合わせたボランティアセンターの存在、重要性を再確認した。

これは、一つの例に過ぎないが、このことを通しても活発な若い力を支え、アクションに結びつける大学ボランティアセンターの役割の大きさは言うまでもないだろう。では、現在、大学ボランティアセンターは具体的にどのような活動をどのような環境の中で行っているのだろうか。ここ

では、大学ボランティアセンターの中で目立って積極的に活動をされているところを検証してゆくとともに、それらの活動を見た上で、立命館大学内のボランティアセンターにおいて如何なる取り組みができるか提案をしたい。

第1節 各ボランティアセンターの取り組み

以下の情報調査期間は、2003年9月である。また、各機関のホームページを主に情報を集めた。この事によって、文章をお読みになる時期の情報と大きく違いが生じる事が予想されること、情報に偏りが生じていることを大変恐縮ながら冒頭に述べさせていただきたい。

1) 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

2002年、日本を代表する画家である平山郁夫氏の作品の寄付とともに開設。現在は月曜日から金曜日の10時から16時まで開室している。2003年9月現在、ホームページより調査を行った結果、以下の企画（募集）が行われていることがわかった。

WAVOC交流会「わわわのわ」、WAVOCボランティア論ゼミ、環境ボランティア学校、中国ハンセン病療養所支援プロジェクト、養育家庭制度30周年記念事業、講演会、対談、杉並小学校・中学校ボランティア募集、スペシャルオリンピックス日本・東京地区大会援助ボランティア募集、大久保中学校土曜学習クラブ「大久保塾」ボランティア募集、2004年度ボランティアインストラクター募集、WAVOC提携講座「ボランティア実践論」、ボランティア入門講座などである。

以下、 、 、 、 、 について詳しく述べる。

のWAVOC交流会「わわわのわ」は、毎週一回16:20から17:50まで、WAVOC事務所の2階において、専門家を招いたレクチャー形式の会や、交流を目的とした会を開いている。対象者に限定はなく、学内外のボランティアに興味を持っている人から、なんとなく見てみたかった人など、幅広く受け入れている。参加の申し込みも不要である。また、その発展形として、2003年10月5日（日）10:00～16:00に「丸々一日"わわわのわ"ボラ体験討論会」として、夏休みまでの経験などを丸一日かけて互

いに交換し合う催しを開催。途中参加・途中退場自由とし、いろいろな人との意見交換、情報交換を行う。

のWAVOCボランティア論ゼミ環境ボランティア学校は、毎週火曜日5限に、ボランティアセンター客員講師の西尾雄志氏を講師として行う授業である。定員は10名程度、早稲田大学の学生には限らず、大学生なら誰でも受講できる。授業の形式は、前半3回がボランティアの概論を講師が行い、4回目以降は、受講生のゼミ形式で行う。また、時にゲストスピーカーも招く。研究の延長として、冬休み・春休みを目途に実践として何かのボランティアを行いレポートとしてまとめる。そうすることで、ボランティアの理論面と実践面の統合を目指す。

の環境ボランティア学校は、ボランティアセンターと早稲田大学エコ・キャンパス推進本部が協力して環境ボランティアなどで実際に現場に携わってきた人を招き、環境ボランティアに興味がある人を対象に実践面に役立つ知識・情熱・意欲を高めるためのプログラムとされている。1年間を通して、毎月一回程度のペースでプログラムを実施。企画運営に関しては学生中心にやってゆく。学校のコンセプトは、「入学は、環境ボランティアに興味を湧いた日。卒業は、やりたい事が見つけられた日」である。実施済みのプログラムとしては、「大隈庭園探検」(2003年5月24日、早稲田大学にて)「ホタル見学会」(2003年6月19日、板橋区エコホリスセンターにて)「ホタル勉強会」(2003年7月9日、早稲田大学にて)などがある。計画中の企画として、オオムラサキを護る、田植え体験、炭焼き体験、清掃登山、オオタカ調査、海がめ調査、リサイクル実験などがある。

の中国ハンセン病療養所支援プロジェクトでは、チャリティイベントを行い、その収益を中国ハンセン病療養所での活動(トイレ建設・台所建設・シャワー室建設など)にあてる活動をはじめ、オムニバス形式での公開講義(ハンセン病問題の概論・日本におけるハンセン病・医学法の観点からのらい予防法とは何か?・世界のハンセン病事情(医学的見地から)・中国ハンセン病療養所における学生ボランティアの活動などのテーマで学ぶ)、国立ハンセン病療養所多磨全生会園ハンセン病資料館見学、中国ハンセン病療養所ワークキャンプ(ワークキャンプについては2003年度はSARSの影響で実施されなかった)などの活動を行っている。

のボランティア入門講座では、「ボランティアって何?」「今まで1度もボランティアをしたことないんだけど・・・」というボランティアの初心者を対象とし、ボランティアの基礎知識(ボランティア保険システムの解説、ボランティア情報の探し方など)・注意事項の説明、各分野におけるボランティア活動の具体例の紹介、車椅子や高齢者疑似体験キットを用いた介助体験などを行う。2003年10月25日(土)、11月22日(土)、12月13日(土)の13:00-15:00に、WAVOC事務所の2階にて無料で行われる。また、共催として早稲田学生ボランティアセンター、協力団体として新宿区社会福祉協議会、東京ボランティア・市民活動センター、早稲田大学各ボランティア団体(サークルなど)がある。

2) 明治学院大学ボランティアセンター

1999年に発足し、現在は2箇所のキャンパス(神奈川県横浜市・東京都港区)に一つずつあり、専任のボランティアコーディネーターを配置している。組織として、明治学院大学ボランティア運営委員会(学長・副学長・各学部選出教員1名・宗教部長・学生部長・教務部長・センター長・大学事務局長・横浜事務局長・ボランティア推進委員のうち1名)のもと、センターの職員として、センター長・センター長補佐・ボランティアコーディネーター・事務職員が機能している。学生スタッフとしては、20名の学生がボランティアとして活動している。

年間のスケジュールは、4月:ボランティアサークル合同説明会()・新入生へのアンケート実施、6月:大学祭(戸塚祭り)への参加、7月:夏休みボランティアオリエンテーション、9月:ノートテイク(要約筆記)集中講座()、11月:公開講演会()となっている。

その他の活動として、ボランティアセンター通信(年3回発行、内容として、学生のボランティア体験記・ボランティア情報・講演会などの報告・行事の案内や募集など)の発行・ボランティア情報閲覧ファイルの作成・関係機関や施設とのネットワーク作り・図書の貸し出し・ボランティアセンタースタッフ学生の育成などがある。また、企画として、ワークキャンプ()なども行っている。

上記の ~ について、活動報告を参照して詳細を述べる。

のボランティアサークル合同説明会では、2002年4月17日(水)の4・5限に横浜校舎の330教室にて学内だけでなく、他大学や地域のボランティアサークルやボランティア団体を15団体集めて、ボランティアの募集と説明を行っている。

のノートテイク(要約筆記)集中講座は2002年9月25日~26日に白金校舎にて行われた。目的として、学内聴覚障害学生サポートボランティアの養成があった。地域からは22名の参加があった。二人一組でノートテイクの実技、聴覚障害者の疑似体験や、ノートテイクボランティアの登録などを行った。

の公開講演会については、1999年11月、「ボランティアが日本を救う」と題し、森田武(明治学院理事長)、ケン・ジョセフ(アガペハウス・インターナショナル代表)を講師に招いた。2000年11月は「私は生きている 私は何かができる 自分の存在が他人の喜びにつながる」と題して丸山浩路氏を招いた。2000年度のシンポジウムの際には、学生150名、地域からは70名の参加があった。

のワークキャンプについては、1999年より、アジア農村指導者養成専門学校「アジア学院」にて、定員約20名、2泊3日のワークキャンプを宗教部と共催で行っている。これについて実施後の報告文には「今の学生がほとんど体験したことの無い「農業」という作業を通じて、当たり前のこととして消費していた食物に対し、自分が手にするまでの過程に思いをはせたり、アジア学院の理念に触れて、南北問題・国際協力の問題・「共生」に向けた取り組みについて考え始めるきっかけが与えられるなど、「農業体験」に加えて、学生の世界が広がるという利点を見出した。」と書かれていた。

3) 龍谷ボランティア・NPO活動センター

2001年に設立された。運営の構成員として、学生スタッフが35名いる。運営体制として、センター長(1名)、副センター長(1名)、センター委員(9名)とある。主な活動としては、関係資料の閲覧(Web上でも詳しく情報提供を行っている)・ボランティア活動相談・書籍、ビデオの貸し出し・メールマガジンの配信・様々な企画の運営などがある。

まず、ボランティア活動相談業務として、ホームページ上やメールマガジンにて、児童・高齢者・障害児(者)・青少年・在日韓国人・環境・国際などのボランティア募集情報を発信している。また、月・火・金曜日の昼休みと木曜日の4限目にスタッフが必ず待機し、コーディネートを行っている。

次に、企画の詳細について述べる。2003年度の活動報告によると、5月29日、30日に、「NPO展示会～何してはりますのん?～」6月「みんなでボランティア体験ツアー」7月「七夕祭り in NPOセンター"チーム愛企画"」8月「沖縄研修旅行」(スタッフ対象)10月「みんなでボランティア体験ツアー vol.3」などが行われている事が分かる。

10月26日に行われた「みんなでボランティア体験ツアー」では、NPO法人ゆうりんの家のバーベキューにおける車椅子の移動や食事介助を募集した。学内生のみを対象とするのではなく、地域の方の参加も認めている。このツアーは、ボランティアをまだした事がない人などの一日ボランティア体験のための企画である。スタッフも参加し、案内役を務める。

4) 佛教大学ボランティア室

2004年4月に学生・教員が協力して開室。現在の活動としては、機関紙の発行・リーフレットの作成・ボランティアの企画・セミナー、講座の開催・ボランティア活動の紹介・関係図書の見学、貸し出しなどをおこなっている。ホームページも有しており、情報の提供や活動報告などを行っている。最近の活動報告として、以下を紹介する。

2003年9月10日(水)「ボランティア講座」と題した講演会とボランティア団体合同説明会を行っている。午前中はきょうと学生ボランティアセンター代表赤澤清孝氏の講演、午後は団体説明会を行っている。参加状況は、ホームページの写真を見る限り多くの学生が参加し、賑やかに行われているように感じる事が出来る。

第2節 プログラム別の取り組み

1) ガイダンス

ガイダンスと一言に言っても、その形には様々なものがある。ここでは、私達が以前行った「ボランティアガイダンス」の中に含まれていたボランティア合同説明会、講演会、ノートテイク講座や障害体験の3つに分類する。

A ボランティア合同説明会

早稲田大学の「ボランティア入門講座」・明治学院大学の「ボランティアサークル合同説明会」・佛教大学の「ボランティア講座」が当てはまるだろう。ボランティアをこれからはじめようと思っている学生や地域の方を対象として、ブース形式やパネルディスカッションの形をとり、学内外のボランティアサークルの活動紹介や、ボランティアそのものについての説明などを行っている。先ずは、身近なボランティアについての情報を得ることに重点を置いているようである。明治学院大学では、この合同説明会を年間行事として組み込み、定期的に行っている。

B 講演会

明治学院大学の「公開講演会」や佛教大学の「ボランティア講座」内の講演会がある。講演会を独立した企画として行っている場合もあれば、Aの合同説明会と同じ企画の中で行っている場合もあるようだ。講演会のテーマとしては、「ボランティアが日本を救う」「私は生きている 私は何かができる 自分の存在が他人の喜びにつながる」などが設定されている。また、地元で活躍しているボランティアセンター職員や、自分の大学の教授を講演会の講師に招いているパターンと、有名人を招き、講演を行うパターンがあるようだ。

C 体験企画

早稲田大学の「ボランティア入門講座」内の車椅子や高齢者疑似体験キットを用いた介助体験や、明治学院大学の「ノートテイク（要約筆記）集

中講座」や龍谷大学の「みんなでボランティア体験ツアー」などが上の文章の中で挙げられている。目的という点からみると、早稲田大学や龍谷大学のような「知る事」を第一目的に挙げたものと、明治学院大学のような「スキルをつけること」を第一の目的にしたものに二分できるようである。

2) 相談・コーディネート

どの大学も、企画と平行して行っている。早稲田大学では、「WAVOC 交流会 わわわのわ」を通して、ボランティアをもった人同士の交流の場を設けている。明治学院大学では、専任のボランティアコーディネーターを置いている。龍谷大学では、ホームページやメールマガジンにおいて情報を発信し、決まった時間にはスタッフがセンターで相談業務を行っている。佛教大学では、ボランティア活動の紹介もセンターの活動の中心においている。相談業務に関して、どのような方法を以って行っているかはホームページからは分からなかった。

3) 教育

早稲田大学の「ボランティア論ゼミ」や「WAVOC 提携講座 ボランティア実践論」がある。これらは、ボランティアの概念などの学びや、実践を通して肌を通してボランティアを知ることがを目的としている。

4) 発行物・ホームページについて

どの大学も大学のホームページから、ボランティアセンターのページに進むことができる。ホームページの中では、ボランティアセンターの説明や利用に際した情報、活動記録、今後の企画の募集、書きこみ、など、工夫が凝らしてある。

発行物については、ボランティア情報や活動記録、コラムなどを掲載している。単発で発行するものよりは、継続的に発行しているものが多い。

第3節 立命館大学ボランティアセンターにおける取り組みの提案

4つの大学ボランティアセンターをホームページから検証してきたが、どれに関しても情報収集能力が未熟なことから、調査不足である事を反省したい。どのボランティアセンターにも、企画があり、相談業務がある。総合大学は福祉・国際・環境等、多岐にわたる分野のボランティアを支え、単科大学では、アットホームな感じの企画を行っているようだ。どのボランティアセンターも自身の資源や特色の把握を行っている事が前提で活動を行っているように感じた。

さて、立命館大学の持っている資源を考えたときに、マンモス大学ならではの学生数の多さが一番に思いつく。立命館大学生は学部生のみで三万人と言われている。私の知っているある市は「目指せ、三万人の市へ」と運動を行っていると言うから、立命館大学生の数の多さから、大学自体をコミュニティと考えることは可能であろう。また、現役生のみではなく、社会で活躍されている卒業生も私達立命館大学を支える大きな力となる。これらは、様々な土地で育ち、様々な興味関心のもとに、多種多様な活動を行っている。今後、これらの人々のボランティアに関する関心度合いを高め、協力体制を築く事ができれば、ボランティアセンターの可能性は益々高まるばかりであろう。

多くの資源が活用できると仮定して、今後の活動に取り入れて行きたい事項は、ガイダンスの定期的開催、ボランティア分野の拡充、情報誌の発行、相談業務のマニュアル化などである。

これらの実現のためにはスタッフ自身の質の向上、センターの広報の充実など、クリアしなければならない壁が多数ある。しかし、このように他の団体の活動状況を調査することは、抱えている問題を客観的に見つける良い機会であっただろう。今回の調査がボランティアセンター設立に向けたステップアップに繋がれば幸いだ。

(文責：藤井綾子)

【注釈】

1 山本有紀「大学・学生ボランティアセンターの現状と課題からみる将来像 - 8つの大学・学生ボランティアセンター事例から - 」『大学ボランティアセンタースタディ - 立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて - 』立命館大学人間科学研究所、2003年、p118。

【参照 HP】

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

<http://www.waseda.ac.jp/wavoc/index-j.html>

明治学院大学ボランティアセンター

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~voluntee/front/>

龍谷大学ボランティア・NPOセンター

<http://www.ryukoku.ac.jp/npo/>

佛教大学ボランティア室

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/buvcc/01.html>